

福沢諭吉『増訂華英通語』の「音訳」と「義訳」

平井 一 弘

序 節

『増訂華英通語』⁽¹⁾は福沢諭吉が初めて出版した著作である。福沢は万延元（1860）年1月19日に江戸を発ち、江戸幕府初の海外派遣使節である遣米使節の護衛艦「咸臨丸」に、軍艦奉行木村撰律守の従者として乗り組み、サンフランシスコに行った。サンフランシスコ到着は2月26日である。福沢はそこで『増訂華英通語』の原書となった、清人子卿の支那（以後、中国）語の『華英通語』を購入した。また、福沢はこの時にウェブスターの辞書をも購入した。

約2か月のサンフランシスコ滞在と約1か月の帰路の航海の後に、福沢は同年5月5日には浦賀に帰るが、その年の8月には、早くも、『華英通語』の訳書であるとされる『増訂華英通語』を出版した。これは、知られている限りでの当時の福沢の英語学習歴と英語力からすれば、実に、驚くべき仕事であるように思える。

当時の福沢の英語学習歴と英語力を『福翁自伝』⁽²⁾（以下『自伝』と略）によって簡単にまとめる。福沢は開港間もない横浜に行き、蘭学から英学に転向する決心、いわゆる「英学発心」をしたのが1859（安政6年）の夏である。『増訂華英通語』の出版に先立つこと約1年である。この1年間の福沢の英語学習とは、横浜で購入した「薄い」（101。数字は引用箇所。以下同じ。）蘭英会話書を、「誠に小さな」（102）ホルトロップの英蘭（蘭英）辞書を用いて独習することであった。発音の学習は「子供でも宜ければ漂流人でも構わぬ、爾う云ふ者を捜し廻っては学んで居ました」（104）である。

さらに、福沢が『増訂華英通語』を出版した頃の英語力は次のようであった。「私は亜米利加渡航を幸に彼の国人に直接して英語ばかり研究して」、帰ってから蘭書ではなく英書を読みかつ教える。「所がマダなかなか英書が六かくして自由自在に読めない。」したがって、英蘭対訳の辞書を便りに、生徒と共に勉強していた（122）。英語の学習を開始してから約1年半の英語学力は、一般的に、ここに表現されている程度であろう。

この当時福沢はどのようにして英語を学習していたのであろうか。福沢の英語の学習法に関してこれまでに言われていること（推測も含めて）は以下の5点であろう。(1)上に福沢自身が言う、英蘭辞書を便りに独習、そのうちに、既にあるオランダ語の知識が英語に移した（『自伝』104）。(2)中浜万次郎に英語（発音）を習った。⁽³⁾ (3)『増訂華英通語』に見られるように中国語（漢語）を通して学習した（後述）。(4)『増訂華英通語』出版以降のことであるが、幕府翻訳方で公文書の翻訳に当たることによって、英語の力をつけた。⁽⁴⁾ その他に、(5)ウェブスターの辞書を用いた可能性も考えられるかも知れない。

上のうち(4)を除いて、(1)から(5)のいずれもが『増訂華英通語』出版の時期と関係するが、しかし、

そのいずれも『増訂華英通語』の音訳と義訳の完成度を説明するには不十分であるように思われる。(このことは(1)から(5)の可能性を全て否定するものではない。また、私は(4)こそが福沢の英語力の涵養に最も役立ったのではないかと推測しているが、これは本論の範囲外である。)

『増訂華英通語』に見られる福沢の英語力は、訳語・訳文にしる発音にしる、とても、ここで言われている、小さな英蘭対訳の辞書を便りに英語を勉強していた、という低いレベルのものであるとは思われない。例えば、『増訂華英通語』には“Tithing”という単語が「ジフニングミ」と訳されている。『研究社新英和大辞典』によれば、これは古いイギリスの法律用語で「十人組(近くに住む10人の自由土地保有者とその家族を一組にして、その行動について連帯の責任を負わせた)」とある。福沢の訳「ジフニングミ」は正しく、かつ、この訳語も今日のものと同じでさえある。

“Tithing”に付けられた子卿の中国語訳は「甲保」(あるいは、保甲)である。『廣漢和辞典』によれば、「保甲」は「宋の王安石の新法」であり、「地方の自衛を担当する自治組織」で「十家を保」(宋史 王安石伝)とする、とある。

今日のウェブスターの“Tithing”の説明は、*Webster's Third New International Dictionary* (1986)によれば、

1. a small administrative division locally preserved in many parts of England apparently orig[inally] consisting of ten men with their families or of the tenth part of the hundred. 2. 英語は省略するが、十分の一税の徴収に関する説明。

福沢が購入したウェブスターは簡約版⁽⁵⁾だとされているが、今日の簡約版である *Merrriam Webster's Collegiate Dictionary* (10th ed. 1993) には、上の1の説明だけである。

「保甲」が「十人組」の意味で、福沢がそのことを知っていたならば、“Tithing”は中国語から訳されたということもできよう。もし福沢がこのことを知っていなければ、ウェブスターを参照したとも考えられるであろうが、もし福沢のウェブスターに上のような説明が与えられていたとするならば、1と2のうちで1を選択して、あるいは1だけであったとしても、それを「十人組」と訳せるだけの英語力は大変なものである。あるいは、当時の英蘭辞書、蘭日辞書などでこの英単語の意味を調べることができたのであろうか。さらに、別の調べ方があったのであろうか。⁽⁶⁾

さらにもう一例を挙げる。これは発音に関するものである。“Quinine”という単語が挙げられて、これは「クワイナイヌ」と発音表記がなされている。この単語の意味は化学物質の〈キニーネ〉であり、「キニーネ」に近い発音はイギリス音、「クワイナイヌ」に近い発音はアメリカ音である。

緒方洪庵の適塾でオランダ語の医学書や化学書を読んだ福沢が、これを〈キニーネ〉と発音して(オランダ語では kinine)、この訳語(オランダ語から日本語になったとされる)を付けているのなら、福沢のオランダ語の知識が英語に転嫁されたと考えられるが、福沢は前述のアメリカ式の発音をしているのであり、また、この語に訳語は付けられていない。福沢はウェブスターの発音記号(今日では /ˈkwɪˌnɪn/)を読み取ったのであろうか。一般的に言って、英語の初学者が英米の辞書の発音記号を読み取ることは困難である。

考えられることは、福沢がこの語の発音だけを、おそらくアメリカ人に聞いたのであろうということである。先に見たように、福沢はアメリカへの渡航で、アメリカ人に直接して、「英語ばかり研究」したと言っているが、その研究が具体的にどのようなものであったか、まったく不明である。ただ、可能性としては、アメリカ人に英単語の発音を尋ねたことは考えられる。

しかし、福沢が買ったばかりの『華英通語』を片手に、片っ端からアメリカ人を掴まえて英語の発音を尋ねたとしても、英語音の聞き取り能力と、そのカタカナでの記録方法だけを考えると、英語発音のカタカナ表記は容易なことではない。福沢がどのようにしてこれを行い得たのかは大変興

味のあることである。

英語音のカタカナ表記に加えて、『増訂華英通語』には実に多数の単語、句、短文が、俗語・俗文で訳されている。一言でいえば、福沢がどのようにしてこの『増訂華英通語』を完成させたのか理解できない。

これを少しでも理解するために、本稿は『増訂華英通語』の特徴を調べることを目的とする。具体的には、以下の三つを目的とする。『増訂華英通語』の(1)構成、(2)「音訳」、及び、(3)「義訳」の特徴を、当時の他の英学書と比較して知ること。本論に入る前に、『増訂華英通語』の「音訳」と「義訳」について、福沢自身が言うことと、先行研究に、少しく触れておく。

まず、『増訂華英通語』について福沢自身のコメントを挙げる。福沢が『増訂華英通語』について言っていることは実に素っ気ない。「福沢全集緒言」⁽⁷⁾には次のように言われているだけである。すなわち、「是れは翻訳と云う可き程のものに非ず、原書の横文字に仮名を附けたるまでにして事固より易し」。ただ、Vの字の発音をウワに濁点をつけて示したのが「当時思付の新案」であった。ここで「原書の横文字に仮名を附けた」とは、一つには、発音表記としてのカタカナを付けたこと、さらに、英文の翻訳をカタカナ表記で行ったこと、これらの両方を指しているのであろう。福沢は、さらに、凡例を漢文で書いたことと、闕字をしたことを反省している(323~324)。

後世の研究者はこれら二つのカタカナ表記のうちの、福沢のその強調にしたがって、発音表記のほうに多くの興味を持ったようである。以下に、福沢研究者、国語学者、および洋学史家のコメントを見る。まず、富田正文⁽⁸⁾は、後述する小文字や「ヌ」の文字での発音表記と、ウワの濁点を指摘して、福沢が、「できるだけ原音に近づけ(175)」るべくカタカナ表記をしたと言う。富田は、さらに、『福沢論吉全集』第1巻(『増訂華英通語』を含む)「後記」で、このVの発音に触れ、この頃には、したがってこの書にも、「英語の正音に近い発音表記が見られるようになり、その意味でこの書はわが国の英語学発達史上に注目すべき位置を占めるものである(614)」と言う。

「ヌ」やウワの濁点の指摘は多くの福沢研究者によってなされているが、興味深いことに、福沢研究の代表作である石川幹明『福沢論吉伝』(岩波書店、1932年第1刷、1981年第5刷)は『増訂華英通語』について何も言及していないようである。福沢の初めの渡米を扱った第1巻の該当箇所にも、また、索引にも『増訂華英通語』の文字は見当たらない。

国語学者や洋学史家も福沢の発音表記に注意を向けるが、同時に、福沢の俗語、俗文や英語学習にも興味を示す。国語学者の杉本つとむ⁽⁹⁾は、福沢の発音(表記)は「かなり問題である」として、その理由を、「やはりオランダ語ふうであり、国籍不明のそれである(265)」とする。杉本は、さらに、清水卯三郎『ゑんぎりしことば』(後述)の発音表記と福沢のそれを対照して、福沢自慢のVの音に関しても、清水は「うはばをしたくちびるにしかと、あてっ、」〈ウヱリ〉(very)と発音せよと言っているから、表記は「ウ」であっても、福沢のやり方に勝ると言う(319)。また、清水のカタカナ表記一般に関しても、「時にかなり現代的」であり、「福沢論吉などのそれに比較すると格段の違いである(321)」と言っている。さらに、杉本は、『増訂華英通語』で使われている翻訳文(俗語、俗文)は当時の日本語を知る資料であるとも言っている。

英学史家の高梨健吉と大村喜吉⁽¹⁰⁾は、福沢に対して杉本よりはるかに同情的で、福沢がVの音に「ヴ」「ヅ」を当てたのは、「わが国では初めてのことで福沢の工夫がうかがわれる」(73)と言う。

洋学史、洋語教育史を研究する茂住實男⁽¹¹⁾は、『増訂華英通語』と福沢の英語研究に言及して(230~231)、『増訂華英通語』はオランダ語を媒介しての英語学習と直接の英語学習との端境期の「中国語を通しての英語研究の一つである(30)」と言う。茂住と同様なことは杉本(前掲書)も言う。すなわち、『増訂華英通語』は、「幕末の日本の英学に貢献した中国語による英学書」である(262)と

する。茂住も杉本も、福沢が『増訂華英通語』を学ぶことによって、発音や意味を中国語を通して学習したとは明言してはいない。しかし、その可能性は暗示されているように思われる。

上記の書物もその他の論文やコメント⁴⁴も、多くは『増訂華英通語』自体の研究ではなく、それを巡る歴史的、書誌的な言及であるようである。

次に、福沢自身が付した『増訂華英通語』の性質を、その「凡例」に見る。「凡例」には大略次のことが述べられている(70)。

- (1) 日本も西洋との貿易が盛んになり、英語が必要となるので、中国人のための英語教科書である『華英通語』を日本語に訳し、日本人の商人の役に立てたい。また、カタカナ発音表記は日本の知識人のためにも役に立つはずであるとも暗示されている。
- (2) 和訳をしていない語句は、日本にそれが無い場合か、また類似のものが有っても妥当な訳語が見当たらない時である。
- (3) 「義譯は主として英語の意を存す。」したがって、原訳の中国語訳と齟齬するものが有る。しかし、原訳もすべて正しいとは限らないから、齟齬するからといって、日本語訳を軽々にあげつらうな。
- (4) 「義譯の語は鄙俚を厭はず、勉めて俗語を用ひ、且國字を以て之を書する」理由は、単に漢字を多く知らない日本人商人の為のみでは無く、「亦外客の我が土音を學ぶ者の一助たらしめんと欲する耳。」
- (5) 「音訳國字」の発音法に関しては、(a)小さい字は「急口低音、口内にて之を讀むを要す。」(b)ウワの濁点はブバとウワとの間の音である。(c)ヌの字は上の字と合わせて「急音」で読む。

この「凡例」から、今まで触れなかった、幾つかのことが解る。第一に、『増訂華英通語』は漢字を知らない商人のためと明示はされているが、実は、知識人のための英語学習書とも目されていたらしいこと。第二に、これは日本人商人のための英語学習書のみではなく、外国人のための日本語(恐らく、漢語、漢文ではなく)教科書としても作られたこと。このことが、過度とも思えるほどの、カタカナ及び俗語・俗文の使用に繋がっているのであろうか。また、中国人が日本語を学習する際の便のために、原書の中国語訳が残されているのかもしれない。第三に、福沢の日本語訳、すなわち、「義譯」は主として英語を訳したのであって、原書の中国語(漢字)を訳したのではないとされていること。したがって、原訳の中国語訳と福沢訳との間に齟齬するものが有る、と福沢が意識していること。第四に、カタカナの「音訳」にはVの音以外にも、幾つかの工夫が施されていること。

第1節 『増訂華英通語』の構成

『増訂華英通語』の構成を(A)項目、(B)収録語・句・文の数、(C)収録語・句・文の内容の3点から見て、それぞれを当時の他の英学書と比較する。

A. 項目

1. 『増訂華英通語』の冒頭の目録

『増訂華英通語』の冒頭近くにおかれた「目録」の項目は以下の通り。

天文類、地理類、人倫類、職分類、國寶類、五金類、玉石類、數目類、時節類、刑法類、紬緞類、布疋類、首飾類、顔色類、瓜菜類、藥材類、疾病類、茶葉類、通商類、食物類、酒名類、飛禽類、走獸類、魚蝦類、器用類、房屋類、百工類、菓子類、身體類、草木類、各埠類、船隻類、炮製類、寫字物類、粧扮類、工器類、房内用物類、單字類、二字類、三字類、四字類、五字類、六字類、七字類、長句類、單式類。

注 「字類」に付けられた数字は、原著中の中国語訳語、訳文に含まれる漢字の数である。例えば、「二字類」Future「将来」。福沢の分類でも、四字類までは、原則的にこの漢字の数にしたがって分類されているが、「五字類」「六字類」には例外が沢山あり、「七字類」になると例外はなくなる。

2. 『増訂華英通語』本文中の項目と語・句・文の数

上の目録と本文の間には項目に関して多少の異同がある。以下の表1で、*は『増訂華英通語』冒頭の目録と順序が異なる項目。本文中での項目名が目録のそれと異なる場合には [] に目録の項目名を入れる。項目の順序は本文内の順序。項目右の数字は各項目中の語、語句、短文の数。()内は福沢訳の無いもの数。英語は、福沢が訳語を付けていないものの例。訳語が付けられていないものが各項目中3語(句、文)以下の場合に限りここに英語を入れる。

表 1

天文類	30	魚蝦類	33(1) Water green
地理類	45(2) Isthmuse(ママ), Slack water	器用類	223(41)
*職分類	32(24)	房室類 [房屋類]	120(9)
人倫類	65(2) Commercial agent, Law adviser	工匠類 [百工類]	80(2) Tinsel maker, Ornamentworker(ママ)
國寶類	23(8)	菓子類	45(17)
五金類	27(3) Black lead, Malachite, Orpiment	身體類	64(2) Tonsil, Health
玉石類	14(2) Gypsome, Crystals of alum	草木類	17(2) Rose wood, Ebonylike wood
數目類	35	各埠名類 [各埠類]	32(16)
時節類	76	船隻類	46(11)
刑法類	59(7)	炮製類	32(10)
綉緞類	45(27)	字房物類 [弱字房什物類]	17(2) Wafer, Ceiling wax
布疋類	16(9)	粧扮類	16(2) Bracelet, Ponge
首飾類	64(10)	工器類	33(3)
顔色類	46(5)	房物類 [房内用物類]	17(2) Wash-stand, Cradle
瓜菜類	48(10)	單字類	240(1) ought
藥材類	17(1) Quinine	二字類	292(8)
疾病類	32	三字類	57(2) one share trade in person
茶葉類	30(22)	四字類	19
通商貨類 [通商類]	142(30)	五字類	30
食物類	62(23)	六字類	40(1) I have ordered one to Japan.
酒名類	32(23)	七字類	71(4)
飛禽類	39(6)	長句類	59(1) I will give ten dollars a picul.
走獸類	40(2) Goat, Guinea pig	單式類	

- 注1. 紬緞類=布の種類。首飾類=衣料品。顔色類=色。器用類=台所・室内用品。房室類〔房室類〕=建物。この「類」の最後の1ページ空白。各埠名類=国名、都市名。訳不要?例、日本。炮製類=料理の仕方、及び料理名。字房物類=文房具。房物類=家具。單式類=記帳の仕方(4ページ)。
 2. 「粧扮類」のPongeには発音表記なし。発音表記なしは本書全体で、おそらく、この語のみ。
 3. 福沢が訳していない英語の語句の例。()内は、原中国語訳と福沢の発音表記)。Isthmuse (土腰・イスムス)、Commercial agent (大班・コムマルシール エジェヌト)、Black lead (黒鉛・ブレッキ リード)、Malachite (鉛皿・メレチャイト)、Orpiment (雄黄・ワルビメント)、Gypsone (石羔・ジブスム)、Quinine (金鷄喙・クワイナイヌ)、Guinea pig (荷嚙猪・ゲヌニー ピギ)、Ornamentworker (燃料師傳。ワル子メスト ウォルカル)、Bracelet (鉤・プレーシレット)、ought (該・ヲート)。

B. 単語・句・短文数

単語——「天文類」から「房物類」まで1,794。

語句——「單字類」から「三字類」まで589。

単文——「四字類」から「長句類」まで219。

計 2,602 (353)

他書との比較

『増訂華英通語』の収録語数の相対的な多寡を調べるために、同じ頃に刊行された『英語箋』(石橋政方編、万延元-1860-年)⁹³及び、清水卯三郎『えんぎりしことば』(万延元-1860-年刊)⁹⁴のそれぞれと『増訂華英通語』を比較する。『増訂華英通語』と『英語箋』及び『えんぎりしことば』の間の項目の合致は概略である。

(a) 『英語箋』

表 2

類	『増訂華英通語』	『英語箋』	類	『増訂華英通語』	『英語箋』
天文類	30	58	走獸類	40	74(「獸」50、「虫」24)
地理類	45	70	魚蝦類	33	33(「魚介」)
職分類	32	-	器用類	223	-
人倫類	65	153	房室類	120	78(「宮室」)
國寶類	23	-	百工類	80	241(「器財」)
五金類	27	21(「金」)	菓子類	45	-
玉石類	14	24	身體類	64	101
數目類	35	45(「數量」)	草木類	17	137(草74、木63)
時節類	76	52(「時令」)	各埠類	32	-
刑法類	59	-	船隻類	46	-
紬緞類	45	-	炮製類	32	-
布疋類	16	64(「服飾」)	寫字房物類	17	-
首飾類	64	-	粧扮類	16	-
顔色類	46	-	工器類	33	49(「火器」)
瓜菜類	48	-	房室内物類	17	-
藥材類	17	-	単語計	1,794	1,349
疾病類	32	62	單字類	240	282(「言語」)*
茶葉類	30	-	二字類	292	-
通商貨類	142	-	三字類	57	-
食物類	62	46(「飲食」)	語句計	589	282
酒名類	32	-	総計	2,383	1,631**
飛禽類	39	41(「鳥」)			差 725

類	『増訂華英通語』	『英語箋』	類	『増訂華英通語』	『英語箋』
四字類	19		長句類	59(1)	
五字類	30		短文計	219	
六字類	40(1)		総計	2,602	
七字類	71(4)				

注1. 『英語箋』の「言語」とは名詞以外の品詞、依頼字、添字、動字、代名字。

2. 『英語箋』の語数(1,631)からは、日用語法と会話は除いてある。したがって、語・句数の比較のために、『増訂華英通語』からも四字類から長句類まで合計219の短文は除いてある。

『増訂華英通語』の語句数は『英語箋』のそれよりも752語・句だけ多い。

(b) 『ゑんざりしことば』

清水卯三郎『ゑんざりしことば』は単語数1,163、短文数439(共に概数)、合計1,602である。その項目と収録語数の内訳は以下の通りである。

あめのお 41、つちのお 57、つき、ひ、のお 65、ひとのたぐい 103、ちすじ 86、ひとのからだのお 75、いへのうつこ(?) (家具類) 87、ころものたぐい 60、くひものたぐい 45、かね、いし、のたぐい 36、ふねのお 38、けもののお 45、とりのお 51、うおのお 30、むしのお 23、きのお 33、くさのお 40、かずのお 116、かいなことば(人称代名詞) 12、つけことば(形容詞) 77、ひとくちばなし(会話文) 約439。 合計 1,602。

『増訂華英通語』の語句と短文の総計は2,602であるから、『ゑんざりしことば』よりも丁度1,000多い。明治になってからの英語教科書で収録語数(勘定の仕方は上に準ずる)を見ると『改正増補英語箋』(明治5)2,476、『増補英語箋』(明治壬申年、明治5)では3,178である。⁹⁹ 明治になってようやく『増訂華英通語』の語句数に匹敵するか、それを越えるものが出版された。

C. 収録語・句・文の内容

1. 他書との項目の異同

『増訂華英通語』の内容の特徴を知るために、『増訂華英通語』と上に挙げた他書との間の項目の異同を調べてみる。まず『英語箋』との比較である。『増訂華英通語』にあり『英語箋』にない項目は以下の通りである。但し、内容そのものの点から見れば、単語は幾つかの項目名のもとに分類されるであろうから、この対比も大雑把なものである。

職分類 [32 (24)]、刑法類 [59 (7)]、瓜菜類 [48 (10)]、茶葉類 [30 (20)]、通商貨類 [142 (30)]、菓子類 [45 (17)]、船隻類 [46 (11)]、炮製類 [32 (10)] などである。

次は『ゑんざりしことば』との対比である。『増訂華英通語』にあり『ゑんざりしことば』にない項目は、職分類、刑法類、薬材類、茶葉類、通商貨類、器用類、百工類などである。やはり大雑把には、これらの項目は上に挙げた項目と類似している。

『華英通語』は、本来、西洋人と取引をする中国の貿易商人のためのものであるから、その目的に合致した単語を多く含み、それらの単語は福沢の「常識」の内の基本単語のはずはないから、福沢は意味を調べることに、当然、多くの苦勞をしたであろう。上の [] 内の収録語数と () 内の訳されていない語数の割合は、他の項目のその割合に比して大きいようである。

2. 同一項目での収録語数の違い

『増訂華英通語』と他書との間に共通する項目で、それぞれの収録語数の違いを調べてみる。まず、『英語箋』と対比する。『増訂華英通語』と『英語箋』の共通項目の収録語数の大きな違いは次の通り。

表 3

『増訂華英通語』		『英語箋』
人倫類	65	153
布疋類	16	64 (「服飾」)
走獸類	40	74 (「獸」50、「虫」24)
百工類	80	241 (「器財」)
草木類	17	137 (草74、木63)

次は『ゑんぎりしことば』との対比。『増訂華英通語』と『ゑんぎりしことば』の共通項目の収録語数の大きな違いは次の通り。

表 4

『増訂華英通語』		『ゑんぎりしことば』
人倫類	65	189 (ひとのたぐい103、ちすじ86)
數目類	35	116 (かずのぶ)
布疋類	16	60 (ころものたぐい)
草木類	17	77 (きのぶ33、くさのぶ40)

上の項目毎の収録語数の顕著な違いの比較から、大雑把に言うと、『増訂華英通語』は人倫、布疋(服飾)、動植物などの語句には他書ほどの興味を示していない。これらの項目の福沢の語数は相対的に少ない。『増訂華英通語』の総収録語数は、『英語箋』や『ゑんぎりしことば』のそれよりはるかに多いのであるから、福沢は、他書にはない項目に多くのページを割いていると言えるであろう。他書にはない項目とはすでに見た、職分類、刑法類、瓜菜類、茶葉類、通商貨類、菓子類、船隻類、炮製類、薬材類などである。

第2節ではこれらのうち特に「職分類」を問題とする。その理由は、福沢が「職分類」に多くの興味を持っていたと推測されることと、同時に、福沢は「職分類」の単語が基本単語ではなく理解するのが困難であったにもかかわらず、全ての単語にカタカナ発音表記をしていること、である。

杉本^四の「語彙分類とその呼称比較一覧表」によれば、「天文」「地理」「時令」等は幕末、明治初期の蘭学書や英学書の冒頭を占めていることから、それらの項目に含まれる語彙は当時の英学者の基本語彙であったとしても良からう。例えば、蘭学書の『蛮語箋』と『改正増補蛮語箋』(箕作阮甫編。嘉永元年-1848年-編集出版のオランダ語学習書)では、ともに、「天文」「地理」「時令」「人倫」「身体」「疾病」が初めの6項目とその順序である。英学書でもこのことは同じである。上に見た

『英語箋』と『改正増補英語箋』（本書は万延2年の石橋政方編『英語箋』を改正増補したもの。明治5年出版）の初めの項目とその順序は、上の蘭学書の項目とその順序に全く同じである。わずかに『増補英語箋』（卜部氏訳『改正増補英語箋』明治5年）¹⁰⁰で、「天文」「地理」「時令」「家倫」に続いて5番めに「官職」が見えるだけである。さらに、清水卯三郎編『えんざりしことば』（万延元年1860年刊）の項目の順序は、既に上で見たように、「あめのぶ」「つちのぶ」「つき、ひ、のぶ」「ひとのたぐい」等である。

このことから、「職分類」が、少なくとも、その冒頭近くに置かれていることは『増訂華英通語』に独特であると解り、また、「職分類」が基本単語ではないことも解る。福沢が『増訂華英通語』の3番目の項目として、基本語彙ではない「職分類」をおいたことの意味することは、第1に、福沢がこの項目に特に興味を持っていたらしいこと、そして、第2に、福沢がこれらの語句の発音や意味を大変な苦勞をして調べなければならなかったであろう、ということである。

第2節 『増訂華英通語』の「音訳」

序節で見たように、福沢は『増訂華英通語』の「凡例」でカタカナ発音表記に注意したことを述べている。繰り返せば、まず、(1)音訳国字の小さな字は「急口低音、口内にて之を読むを要す」。次に、(2)ウワの濁点はブバとウワとの間の音である。最後に、(3)ヌの字は上（直前）の字と合わせて「急音」で読む。

上の「凡例」で福沢が「音訳」とした、カタカナ発音表記とはいかなるものであったのか。本節では、この問題を一般的に検討して、その上で、上記(1)(2)(3)のそれぞれは、具体的には、何を行うことを意味していたのかを検討する。

A. 『増訂華英通語』におけるカタカナ発音表記の一般則

まず、『増訂華英通語』の第1の項目「天文類」の30語で予備調査をして、次に、第2の項目「地理類」の45語で追加調査をして予備調査を補い、福沢のカタカナ表記の一般則を仮説として作成した。最後に、この仮説的な一般則を、第3の項目である「職分類」の48語に当てはめて、一般則とこれらとの間の合致と齟齬を分析した。

予備調査と追加調査の結果（アベンディクスAを参照）に認められる福沢のカタカナ表記の一般則（仮説的）の特徴の骨子をここに繰り返せば、以下の通りである。

1. 一般則の特徴

子音 (1) 語末 t/d を小文字で表記する。

(2) n の音をヌ、ニ・ノ、ン (ing) と区別した。

(a) 語尾 ヌ： (b) 語中 ニ・ノ： (c) ing ン

(3) 語尾 er/ar/ir を「ル」、「アル」と小さく表記する。

母音 (1) スベル a を子音+エ、および長音で表記する。

(2) 母音が2個続けてスベルされる時は長音として表記する。

(3) カタカナ小文字表記は音節の切れ目に合致している（但し、例外もある）。

(a) 語尾の音節 er/ar/ir の表記。

(b) 語中の小文字表記は音節の切れ目に合致する。

(c) スペリング中で同じ子音が重なる場合のカタカナ表記。

— カタカナを重ねる場合は、弱音節+強音節。

例 villege (ヴェルレジ) : /vi-lij/ 例外 : paddy (ペヂ)

ー カタカナが1個の場合は、弱音節+強音節、あるいは1音節の語。

例 terrestrial (タレストリール) : /tə-res/ hill (ヒル)

2. 『増訂華英通語』の「凡例」

『増訂華英通語』の「凡例」で示された「急口低音で読まれるべき小さい字」は上記子音の(1)と(3)に、そして、「急音のヌ」は子音の(2)-(a)と関係する。

「ウワの濁点」は、音声学的にはそれ程重要な特徴であるとは考えられず、上記特徴では省略した。福沢は、『全集緒言』で「ウワの濁点」を新發明と言っているせいか、ほとんどこればかりがその後の研究者によって強調されている。しかし、/v/と/w/の音は、蘭学者や英学者が皆表記法を苦心したことであって(後述)、ワに濁点を付けることは新發明であるとしても、そでできることは、Vをウで発音する傾向を矯正する程度のことであろう。むしろ、小文字表記や「ヌ」のほうが重要である。その重要性は、小さな字を急口低音に読むこと、という指示や音節末尾の「ヌ」の表記は、音節の表示と関係するからである。以下に「ウワの濁点」、「急音で読まれるヌ」、及び、「小さい字は急口低音で読む」をそれぞれ検討する。

(1) 「ウワの濁点」

「天文類」「地理類」「職分類」でVを含む単語は7個現われる。すなわち、Venus (ヴェヌス)、heaven (ヒーヴヌ)、river (リーヴル)、villege ママ (ヴェルレジ)、voyage (ヴォーエジ)、civil (シヴェル)、naval (子ーヴェル) である。「リーヴル」を除いて全て「ヴ」と表記されている。「リーヴル」のヴは、「リヴァー」と読んだ時の「ヴァー」を「ヴル」としたものであろう。「ヴァ」が「ヴ」になるのだとしたら、「子ーヴェル」も「子ーヴル」になるはずであるが、福沢は/va/を「ヴェ」[一般則の母音(1)]と読んだために「子ーヴェル」としたのであろう。要するに、福沢は、「ヴァ」の濁点のない音は「ワ」に近いから、「ヴァ」を「ヴ」と表記したに過ぎないのであろう。

(2) 「急音で読まれるヌ」

アペンディクスAによれば福沢はnを3通りに表記している。それらは、「ニ・ノ」(一般的には、ナ行のカナ)、「ヌ」、及び「ン」(ing)である。福沢は単語の語頭ではナ行のカナを後続の母音に合わせて使う。語頭のnは調査項目中には現われない(近いものはsnow スノ。以下には説明のために「職分類」の単語も使用する。)が、別の箇所ではナ行で表記されている。例えば、「玉石類」のnaphtha (ナプタ)、「数目類」のnineteen (ナイヌテヌ)、「房室類」のnunnery (ノヌ子リ)。しかし、ここで問題とするのは、「上(前)の字と合わせて急音で読む」とされる「ヌ」である。上の語で見れば、「ナイヌテヌ」、「ノヌ子リ」の「ヌ」である。「ヌ」は、単語にnの現われる位置からだけ見れば、語中(Venus ヴェヌス、planet プラヌ子ト、wind ウキヌト)、及び、語尾(Saturn セータルヌ)で使われている。

(a) 語尾のnを「ヌ」と表記することには音声学上意味がある。このnは多くの場合ストップ音になるからである。つまり、「win」に関しては、「ウケン」よりも「ウキヌ」の方が正しいということ是可以する。同様なことは1つの音節の末尾に、nが現われる場合にも言える。例えば、rain-bow (レーヌ・ボー)、con-ti-nent コヌ・チ・子ヌト)。

語尾のnを「ヌ」とする(例、wind ウキヌト)ことには問題があるとも言える。なぜならば、豊田實⁸⁸が指摘するように、「ン」と書いた方が「中間に母音が滲入らず、却って正しい音が出易い」、つまり、windをウキヌトと表記するとwinudと発音されるかもしれない。しかし、nの後に母音が来る場合(例えば、winning)とt/dが来る場合とでは、n音は異なるとも考えられる。その理由は、nとt/dの違いは、t/dが破裂音で、nが鼻音であることだけであり、両

者はともに歯茎音で調音点が同じだからである。カタカナ表記にしたがって発音をしようとする
と、豊田の指摘する間違いが生ずる可能性はあるが、カタカナ表記は英語の音を写したものであ
ると考えると、福沢の表記が無意味であるとは必ずしも言えないのである。

(b) 語中のnが「ヌ」とされている場合。例：Venus（ヴェヌス）、planet（プラヌ子ト）の他に、
thunder（ソヌダル）、princess（プリヌシス）、chancellor（チェヌシロアル）、consul（カヲヌ
シュル）、centurion（セヌチューリオヌ）等。この「ヌ」は、音節を問題とすると、二様の使
われ方があることが解る。

(i) 1音節単語の語尾と同じく、音節の末尾で「ヌ」となる。単語を音節で切り、音節ごとにカ
タカナを割り振ると、このことは明らかとなる。thun - der（ソヌ・ダル）、prin - cess（プ
リヌ・シス）、chan - cel - lor（チェヌ・シロアル）、con - sul（カヲヌ・シュル）、cen - tu
- ri - on（セヌ・チュー・リ・オヌ）。これは「急音で読まれるヌ」であり、全て音節の末尾
で使われている。

(ii) 「急音で読まれるヌ」ではなく、語頭の「ヌ」と同じく、音節当初の「ヌ」の場合。例：Venus
（ヴェヌス）、planet（プラヌ子ト）。Venus（ヴェヌス/Ve - nus/）の「ヌ」は、語頭に該当
する音節の初め（nus）であるから、急音の「ヌ」ではなくて、ナ行の「ヌ」であろう。planet
（プラヌ子ト）の説明はかなり複雑であるが、それでも上の規則から説明できる。planetの表記
上の音節は/plan - et/である。これをカタカナ表記すると「プラヌ・エト」となる。この
語の発音上の音節は表記上の音節と同じ場合もあるし、それと異なり/pla - net/とされる
こともある。この場合は「プラ・ネト」となる。「プラヌ子ト」は混合であり、planが「プラ
ヌ」で音節末尾のn「ヌ」、etが、前のnを受けて（これをリエゾンと呼ぶこともあるが、これ
も急音の「ヌ」ではなく、語頭あるいは音節初めのナ行の「ヌ」「子ト」とされたと考えられる。

「ヌ」をn音の表記とすることに関する福沢の一般則は、1音節中の末尾のnと、そのnの
後にtやdの弱い子音が続く場合は「ヌ」と表記する、というものであろう。

(3) 「急口低音で読む小さい字」

アベンディクスAから「小さい字」に関する福沢の一般則を取り出すと、

(A) 語尾t/d/その他の表記に工夫して、弱い音を示した。

(a) t：プラヌ子ト ミスト フロスト スリート ライト

(b) d：ウヰヌド クラウド エクリプスト

(c) その他：ヴェルレジ バルレヌ プラヌ子ト

(B) 語尾er/ar/irを「ル」、「アル」と小さく表記して弱音節であることを示した。

例：er/ar/ir：ウェーザル、ソヌダル/スタル/エーアル

「小さい字」は全て音節（1音節語を含めて）の末尾である。上の(A)の(c)のみを見る。

アベンディクスAで、(A)の(c)に該当する単語は上記の通り。

アベンディクスB：コーアルチャーアル ゴーブルノアル コム ミスシヨナル

これらの語の原語を音節に分けて示し、片仮名表記を音節に当てはめると、「小さい字」は音節
の切れ目（中黒点）に合致していることが解る。

(1) vil - lege ヴェル・レジ

(2) bar - ren バル・レヌ（「プラヌ子ト」は説明済み）

(3) cour - ti - er コーアル・チャーアル（第1音節が「コーアル」、第2、3音節が一緒になり「チー
アル」

(4) gov - er - nor ゴーブル・ノアル（「ゴーブル」で第1・2音節、「ノアル」で第3音節）

(5) com - mis - sion - er コム・ミス・ショ・ナル (第1、第2音節「コムミス」、第3、第4音節を一緒にして「ショナル」)

しかし、以上の音節は筆記上の音節の切れ目であり、必ずしも発音上の音節ではない。上の各語の発音上の音節は以下の通りである。

(1) /vil - ij/ (2) /bar - ən/ (3) /kōr - tē - ər/
(4) /guv - ər - nər/ (5) /kə - mi - shə - nər/

(3)と(4)は表記と発音の音節は一致している。(5)は、表記上の音節では、第3、4音節を一緒にして「ショナル」と説明したが、発音の音節からは、「ショ・ナル」と区別され、この語はすべて原音の音節に合致してカタカナ表記されていることになる。

(1)と(2)は、それぞれ、1単語中に子音lとrが2個重なっているために、発音上の音節から見れば、音節と片仮名表記は一致していない。すなわち、発音に従えば、それぞれ、「ヴェル・(イ)ジ」、「バル・(ア)ヌ」とでも表記しなければならない。

しかし、上の1(「一般則の特徴」)で母音の(3)-(c)に示したように、スベリング中で同じ子音が重なる場合のカタカナ表記には、音節と関係する規則があるようである。(1)と(2)の単語は、強音節+弱音節で、カタカナを重ねる場合に該当する。villegeは/vil - ij/で第1音節にアクセントがあるから、「ヴェルレジ」となる。berrenは/bar - ən/で、同じく第1音節にアクセントがあるから、「バルレヌ」となる。

以上のことをまとめると、福沢が『自伝』で新発明と自慢したウワの濁点は大した問題ではなく、問題となることは、「ヌ」や「小さい字」の表記である。これらが問題となる理由は、福沢のカタカナ発音が音節の表記と関係するからである。英語の音節の切り方は、英語国民にとっても簡単ではないし、非英語国民は長年英語を勉強しても、そのコツを会得することは難しい。要するに、英語国民でも、正確を期そうとすれば、辞書に頼るしかない。当時英語の初学者であった福沢が、どのようにして、音節を正しく区別できたのか。

福沢が英語の音節を区別しているようなカタカナ発音表記をした理由は、可能性として、少なくとも2つ考えられる。(1)上に述べた、音節とカタカナ表記を対応させる規則を作っていた。(2)英語話者に発音してもらって、それを書き取った。(1)が可能であるためには、福沢は英語の音声学の知識をかなり持っていなければならない。そのような事実はなさそうであるから、私は、少なくとも「天文類」「地理類」「職分類」から判断される限り、(2)の例が多いのではないかと考えている。

B. 一般則の「職分類」への適用

上の一般則を「職分類」に当てはめて、齟齬を分析した結果(アペンディクスBを参照)の骨子は次の(1)から(4)である。「職分類」48語句中一般則にしたがうものを除いて、多少とも規則から外れるものは33ある。それらの大部分は、(1)正しい音節を暗示するもの、(2)正しい母音とそのアクセントを暗示するもの、(3)福沢の間違い、及び(4)その他、に分類される。「その他」は、(a)語尾のer/or、(b)1単語中に同一の子音が2個現われる場合のカタカナ表記は音節に関係する、である。これら4分類のうちの(3)福沢の間違い、を除けば、全て音節や音節のアクセントと関係している。

問題は、福沢は、なぜ、かなりの程度に、音節やアクセントを正しく表示しているのか、である。私の推測による答えは、繰り返しせば、その理由は、特に「職分類」の多くの単語に関して、福沢はアメリカ人の発音をそのまま筆記したのではなからうか、ということである。

この推測を確認する証拠はないから、このことは幾つかの状況からの判断である。これらの状況とは以下のものである。(1)「職分類」の語句の多くは、当時の英学者が知っているべき基本単語で

あるとは考えられない。(2)したがって、その発音を表記するためには、(a)一定の知識(例えば、ローマ字読み)に基いて、発音の仕方を推測するか、(b)原書である『華英通語』の中国語の英語発音表記を読み取るか、(c)ウェブスター等の辞書から発音を読み取るか、それとも、(d)だれから発音をさせて、それを書き取るか、のいずれかであろう。(3)しかし、上記(2)の(a)(b)(c)はいずれも可能性が少なく、したがって、(2)の(d)のみが推測される。また、それを推測させる一定の根拠もある。

1. 「職分類」の語句

第1節に見たように、「天文類」「地理類」は幕末、明治初期の蘭学書や英学書の冒頭を占めていることから、それらの項目に含まれる語彙は当時の蘭学者や英学者の基本語彙であったとしても良からう。しかし、「職分類」が、少なくとも、その冒頭近くにおかれていることは『増訂華英通語』に独特である。このことから、「職分類」の多くの単語が当時の洋学者の基本単語ではないことは推測される。

「職分類」の語彙が基本単語ではないことからして、「職分類」には福沢の知らなかった語句が沢山あったようだ。全48語中で、福沢が訳語を付けていないものがその半分の24語ある。但し、発音の仮名はすべての語に付けられている。福沢が「職分類」中で日本語訳を付けていない語とその音訳は以下の通りである。

Prime minister (プライム ミニスタル) / Great assistant (グレート エシステヌト) / Chief of the literati (チーフ ヲフ ズキ リテレーチ) / Treasurer (ツレジュラル) / Protector (プロテクトアル) / Chief examiner (チーフ エグゼーミナル) / Traitor (トレートアル) / Commissioner (コム ミュシヨナル) / Colonel (コル子ル) / Colonel of a regiment (コル子ル ヲフ エ レジメヌト) / Chancellor of slate (チェヌシロアル ヲフ スレート) / Chancellor (上記) / President (プレジデヌト) / Director (ディレクトアル) / Major-general (メージョーアル ジェネラル) / Officer (オフィシアル) / Local magistrate (ローケルマジストレート) / Captain (カピテナ) / Naval officer (ナヴァル オフィサー) / Consul (カラスシュル) / Centurion (センチュウリヲヌ) / Lawyer (ローイアル) / Assistant (アシスタント: 前にアシステヌト) / Police runner (ポーリスロヌナル)

2. 「職分類」の発音表記

(a) 一定の知識に基づいた推測

当時の福沢の英語の読解力がどの程度のものであったのか。これはおもしろい問題であるが、ここでは『自伝』に言われている通りに、「マダなかなか英書がむずかしくて自由自在に読めない」程度とする。福沢の英語の発音に関しては、上手下手が取り沙汰されている。⁹⁹ここでは、福沢の英語発音の知識は、アベンディクスAに見た、「天文類」と「地理類」の発音表記から引き出した仮説から推測できる程度とする。つまり、基本的には、いわゆるローマ字読みである。

アベンディクスBに見た問題は、「職分類」の語句の発音にはこの仮説が必ずしも当てはまらないことである。このことから、「職分類」の発音表記は、一定の知識、すなわち、仮説に現れた知識に、少なくとも、完全にはしたがったものではないと言える。

(b) 『華英通語』の中国語発音表記

福沢が子卿の原書『華英通語』の中国語による発音表記を参考にしたかも知れない、とは一般的には考えられる。しかし、この原書は発音表記の上ではそれ程役に立たなかったのではなからうか。福沢に漢文の知識が十分にあったとしても、中国語ができたという証拠はない。さらに、福沢のカタカナ表記と子卿の凡例の発音上の指示とは必ずしも一致しない。

『増訂華英通語』の冒頭近くに子卿の「凡例」(この語は使われていない)にあたるものが示され

ている。それによると、子卿は自分の漢字の音声表記の読み方に関して二つの注意を与えている。

(1) 小さい文字は「努めて牙舌唇齒喉の五音に於いて、辣別すること清楚なら」んこと。

(2) 二つの小さい字が合い連なるときは、「急口に合して之を読むを要すべし」。

『増改華英通語』ではこれらの「小さい字」がはっきりと刻印されている場合とそうでない場合がある。例えば、(1)の小さい文字は、Mist ([ミス] 味 時 他)、Hail ([ヘール] 唏 他)、Chart ([チャールト] 札 他) ではっきりしているが、Island (アイランド)、Tide (タイド)、Water (ウォーター) のカタカナ小文字に当てられている漢字は小さくはない。それに対して(2)ははっきりしている場合が多いようである。例えば、River ([リーヴル] 馨 花) Road ([ロード] 馨)。これら2例とも、ともに「合」の字の上にかかれた二文字を小さくしてある。

「天文類」と「地理類」で、福沢のカタカナ表記と原書の漢字表記を比べると、語尾のtに関しては、カタカナも漢字もともに小さく書かれている傾向にある。しかし、語尾のdに関しては、福沢のカタカナは小さいが、原書の漢字は小さくはない。語尾の、or、erなどについても、原書の漢字表記には一貫した傾向は必ずしも見られないようである。つまり、福沢は語尾のカタカナ表記に関して、必ずしも、上の(1)(2)の、子卿による漢字の音声表記のやり方をまねたものでもないらしい。

福沢が原書とした『華英通語』は特定されていないようである。⁹⁹ 慶応義塾福沢研究センターにはハーバード大学蔵の『華英通語』のフォトコピーがあるが、これと『増訂華英通語』の間には大巾な不一致を含む。したがって、以上の(1)と(2)に関して、『増訂華英通語』の版下の作成の過程で、原本と異なる彫り方がなされたとすれば、私の上の観察は妥当性を欠くことになる。

(c) ウェブスター等の辞書からの読み取り

『増訂華英通語』の原本である『華英通語』とともに、福沢はウェブスターの辞書を購入したと言われている。福沢が購入した辞書は簡約版だとされているが、簡約版であろうがなかろうが、ウェブスターの辞書とは、英語を知っているもののための辞書であって、初学者のためのものではない。常識的に考えて、当時英語の初学者であった福沢に、ウェブスターの辞書から、「職分類」の語句の発音を読み取るだけの英語力があつたとは思われない。

(d) アメリカ人の発音の聞き取りと書き取り

「職分類」の語句のカタカナ表記の特徴を、それが音節や音節のアクセントと関係していることはすでに述べた。このことから推測されることは、福沢はかなりの語の発音を誰かから(アメリカ人中浜万次郎)教わったのではないか、しかも、音節ごとに口移しで聞いて、筆記したのではないか、ということである。

例えば、前出の単語 courtier の発音をそのまま聞いたならば、これをカタカナ表記することはできないであろう。仮に上出来でも「コーテイアー」であろう。しかし、これを音節ごとに聞けば、前出のごとく「コーアルチャーアル」と表記すべく聞き取れる可能性もあろう。同様なことは、同じく前出の governor (ゴーヴルノアル)、commissioner (コム ミッションアル)、chancellor (チェヌシロアル)、magistrate (マジストレート (ト))、さらには「ツウジ」と訳されている interpreter (イヌタルプリタル) についても言える。特に最後の2語では、チェヌシロアルの語尾の /lor/ と、イヌタルプリタルの語尾 /ter/ が、それぞれ、区別され、前者では /lor/ が [ロアル] 強調されているように見える。一般的に、語尾 er に対して or を強調する時には、or 「オアル」のように発音することがある。

さらに、アクセントが正しく表記されているように見える。例えば、imperial (イムピーリエル)、examiner (エギゼーミナル)、centurion (セヌチュリーオヌ)、literati (リテレーチ) で、それぞれの長音は正しいアクセントのある音節に合致している。centurion や literati のような珍しい語のアクセントを正しく知ることができるためには誰かに聞かなければならないであろう。

また、treasurer (ツレジュラル) で「ツ」はアクセントのある音節 /treə/ の強い t を表すようである。colonel (コル子ル) は、正しい発音 /kəɹ-nəl/ を聞き取って、コル・ネル書くことはあり得よう。問題は、コロネル・コロヌアル、コロヌエル等のローマ字読みではないことである。また、この語を「コル(r)子ル」と発音するとは、誰かに聞かなければ解らないことであろう。さらに、clerk (クラルク) /klɜ:k/ は米音である。また、序節で解れた「薬剤類」の quinine (クワイナイヌ) -米音- も、アメリカ音を発音する人から聞かなければ表記できないであろう。

C. 当時の英学書の発音表記法

これまで述べてきた音節に関係する表記を除いては、福沢のカタカナ表記は、仮説 2-1、2-2 で推測した表記法の一般則においても、また実際の表記においても、当時の英学書と大きな違いはないようである。以下に英学書の幾つかと福沢の表記を対比する。

1. 清水卯三郎『えんざりしことば』(万延元年、1860年刊)²⁴⁾

『えんざりしことば』には英語のカタカナ表記の発音の仕方が詳しく書かれている。ここで本論に関係するもののみを取り上げると、

(1) 語尾のトまたはドは「たゞそのこゑを、つよくつゞむるのみなり」。コールドをコール、ライトをライのごとく。(2) ルにたてすじ(縦筋)を付す時は「そのこゑをほのかにいふべし」。フォールをフォーのごとく、イステルデイをイステーデイのごとく。(別例は、er、or、ur 等。オイステルス oysters、セイロルス sailors、ポールク pork、シュガル sugar、レパルド leopard、ポルス purse。)

(3) グ [ing] も語尾では、「いちじるしからぬことあり」。(4) ンはンとネの「あいこゑ」である。(5) W は W の音を、ウア、ウイ、ウ、ウエ、ウオで V の音を示す。

(1) から (4) まではすべて福沢も、清水とは少し違った方法ではあるが、行ったことである。ただ、(5) のみが、清水と福沢の違いを示している。ウワの濁点は、清水と比較すると、確かに、福沢の新発明であったのであろう。

2. 柳川春三『洋学指針英學部』(慶応3年1867年刊行)²⁵⁾

柳川は「字」を母音(「韻母」と子音(「子字」)に区別する。子音の発音表記は基本的には「ローマ字読み」に基づく、但し、w は「ウ」(dew 「デイウ」、few 「ヒウ」)。y は「ヤ行」(yes 「イエス」、young 「イユンヅ」)。また、y は、子音の後では、子音の「音ヲ承ケテ声ヲ発セシム」(by 「ビー」、my 「ミー」、daily 「デイリー」)。

母音はカナで表すことは難しいことを述べ、次の指示をする。

- (1) 「合字」は一字に読む。ティとテイ、イユとイユは違う。
- (2) ル、グを小さく書く時は、「其音アリト雖モ微ニシテ」聞こえない程である。
part 「パートル」、Nanking 「ナンキンヅ」等。
- (3) w、v にはヴ、ヰ、ヱ、ヰあるいは、ウア、ヰ、ヱ、ヰ、ヱ、ヰを用いる。
- (4) h はハ行で表すが、アイウエオに近い、f の字とは異なる。
- (5) f の音はファ、フ、フエ、フで表す。

母音の発音は「長短剛柔ノ声アリテ讀法一ナラズ」であるが、原則は、

- (1) a: エ(短音)、エー(長音)が一般的。但し、ア (arm 「アルム」、アウ (all 「アウル」、law 「ラウ」、オ (watch 「ウワッチ」)
- (2) e: イ(短音)、イー(長音)。但し、エ (they 「ゼイ」、prey 「プレイ」)
- (3) i: アイ (I, fine, wine) が一般的。但し、イー (pique 「ピーキ」、machine 「マシー子」、ウに近い音 (bird 「ブルド」)

- (4) o: オ(短音)、オー(長音)。但レウのように読む(do「ドゥー」、to「トゥー」、book「ブック」)
 (5) u: ウ(rude「ルード」、mute「ムート」)、ユ(duke「ヂューク」、hue「ヒュー」)、ウの短音
 でオに近い音(but「ブット」、nut「ヌット」)

清水の『えんざりしことば』と同様に、柳川の『洋学指針英學部』も、福沢が注意していたであろう英語発音の主要点は取り扱っている。しかし、清水や柳川の表記が、福沢のそれほどに音節を反映しているかどうかであるが、いずれも福沢ほどには反映していないように見える。

D. 他書との発音表記の比較

最後に『増訂華英通語』と、他書のカタカナ発音表記の実際を比較する。

1. 『改正増補英語箋』(明治5年)と『英米対話捷徑』(安政6、1859)。⁸⁴

表 5

	『増訂華英通語』	『改正増補英語箋』	『英米対話捷徑』
1	Sphere スフェール	—	—
2	Venus ヴェヌス	ウェーニユス	—
3	Jupiter ジューピタル	ジューピトル	—
4	Mercury マルキューリ	メルキュリー	—
5	Mars マルス	マルス	—
6	Saturn セータルヌ	セーチュルン	—
7	Planet プラス子ト	プラ子ット	—
8	Wind ウィンド	ウキンド	ウイント/ウインド
9	Cloud クラウド	クロード	clouds クロードス/クロード
10	Lightning ライトニン	ライトニン	lightens ライツンス ing 子ン short'ning ヒ(ママ)ヨーツ子ン length'ning レンギス子ン
11	Air エーアル	エーイアル	アヤ
12	Weather ウェーザル	ウェーソル	ワザ
13	Dew デュー	ヂュア(?)ウ	—
14	Fog フォグ	フォグ	フォーク foggy フォーゲ
15	Mist ミスト	ミスト	misty モイステ/メステ
16	Hoarfrost ホーアルフロスト	ホーレル(?)フロスト	frosty フロステ
17	Sleet スリート	スリート	—
18	Star スタル	スタアルス	スター
19	Light ライト	ライト	ライト
20	Eclipsed エクリプスド	イーキリップス(原形)	—
24	Rain レース	レーン	raining ロイ子 rains ルインシ rain レイン
25	Rainbow レースボー	レーンボウ	レンボー
26	Thunder ソスダル	ソンドル	thunders サンダス
27	Heaven ヒーヴヌ	ヒーウン	—
28	Sun ソヌ	ソン	シヤン
29	Moon ムーヌ	ムーン	ムーン

『増訂華英通語』と『改正増補英語箋』との間に、一つだけ大きな違いがあるとすれば、それは、これまで繰り返してきた音節の区別である。前者にはそれがあり、後者にはそれが少ない。幾つかの例を見れば、Mercury に関して、福沢のマルキューリは、Mer-cu-ry の第1音節とその他の2音節にマル・キューリを対応できるのに対して、メルキューリーでは、それができない。なぜならば、メルは1音節なのか、メ・ルと2音節なのか解らないからである。同じことは、Light-ning のライト・ニンとライトニツッについてもいえる。英語の音節とカタカナを対応させられる理由は、小さい字で語中の音節の切れ目が示されているからである。

『増訂華英通語』と『改正増補英語箋』との間には、上のこと以外の大きな違いはない。要するに、両者とも、基本的には、当時の英学者の表記方法であろう。しかし、『英米対話捷徑』のカタカナ表記は、前二者とは全く異なる方法で筆記されたと思われる。例えば、Weather をウェーザルやウェーソルと表記することは、th の音を、清音で読むか濁音で読むか、また、語尾を大文字や小文字で表記するかの問題に限られている。それに対して、これをワザと表記することは全く違った条件がなければならない。つまり、例えば、英語学習上の習慣的な表記を知らないものが、英語の発音を聞いてそれを筆写するという条件である。同様なことは、lightens (ライツンス) やlength'ning (レンギス子ン) についてもいえる。従って、福沢が当時英語の初学者 (しかも日本語を媒介しないで英語を学習した) で、英語音の習慣的なカタカナ表記をよく知らなかったとすれば、いかにして「職分類」の表記ができたのかは不可解である。

2. 『増訂華英通語』と『英語箋』(石橋政方著、万延元(1860)年刊)⁶⁰

次に、これら二者を比べるが、英単語の頭文字を小文字にして、『英語箋』の増訂版である『改正増補英語箋』も併記する。

表 6

【増訂華英通語】	【英 語 箋】	【改正増補英語箋】
heaven ヒーヴヌ	ヒーヴン	ヒーウン
sun ソヌ	ソン	ソン
moon ムーヌ	ムーン	ムーン
eclipsed エクリプスト	イーキリツプス (原形)	イーキリツプス (原形)
star スタル	スタル	スタアルス (複数)
planet プラヌ子ト	ブレネト	ブラ子ット
weather ウェーザル	ウエーゾル	ウエーソル
brother ブラザル	ブロゾル	ブロゾル
master マースタル	マスタル	マストル
one ウォヌ	ウオン	ウォン
three スリー	テイリー	スリー
south ー	ソート	ソース
winter ウキヌタル (タル)	ウイントル	ウキントル
mother マーザル	モーゾル	モーゾル

以上の単語はほとんどが基本単語であると思われるから、heaven（ヒーヴヌ／ヒーヴン／ヒーウン）などの間違いを含めて、『増訂華英通語』、『英語箋』、『改正増補英語箋』の間には大きな違いはない。当時の英学者のいわば常識的な発音表記であったろう。

ここには「職分類」に認められた音節の区別は明確ではないが、それでもすでに分析したplanet（プラヌ子ト／プラネト／プラ子ツト）やweather（ウェーザル／ウエーゾル／ウエーソル）に加えて、winter（ウキヌタル（タル？））に福沢の特徴を認められる。すなわち、win-terはウキヌ・タル（タル？））に音節上対応するのに対して、ウイントルは対応するかどうか明らかではない。『改正増補英語箋』のウイントルは、福沢の表記に近くなっている。

第3節 『増訂華英通語』の「義訳」

『増訂華英通語』の「義訳」（訳語・訳文）に関しては、繰り返せば、その「凡例」で次の二つのことが言われている（70）。以下で「義訳」とは「音訳」に対する言葉であり、いわゆる直訳に対して意識を意味するのではないようである。しかし、福沢の義訳自体は、あきらかに意識である。

- (1) 「義訳は主として英語の意を存す。故に問ま原譯と齟齬する者有り。然かも漢譯も亦末だ必ずしも誤謬無きを保す可からざるなり。看官漫りに和譯の杜撰を罪する勿れ。」
- (2) 「義譯の語は鄙俚を厭はず、勉めて俗語を用ひ、且つ國字を以て之を書する者は、即ち畜に傭人の丁字を知らざる者の為にするのみにあらずして、亦外客の我が土音を學ぶ者の一助たらしめんと欲する耳。」

(1)は、「何」を訳したのかの問題である。福沢の日本語訳は、子卿による中国語の原訳の意味ではなく、主に、英語の意味を写したものであることが強調されている。さらに、同一の英語を訳したにせよ、日本語訳と中国語訳は齟齬するかもしれないとされ、その齟齬の原因の、少なくとも一部は、子卿による中国語訳が間違っているからだ、と示唆されている。

(2)は、これに対して、「どのように」訳したのかの問題であり、それは、なるべく「俗語」を用いて、完全に「國字」（仮名文字、この場合はカタカナ）で表したことである。これは漢語を漢字で書いたのではない、ということであろう。なぜ俗語、國字を用いて訳したのか。その理由は二つ示されていて、(a)「傭人の丁字を知らざる者」、すなわち、漢字漢語を知らない日本の商人のため、また、(b)『増訂華英通語』を用いて、外国人が日本語を学習するため。この前提は、外国人が日本語を学習するには、何千かの漢字を覚えるよりは、イロハ四十七文字とその読み方を覚える方が容易であるということであろう。

以下に、上の(1)と(2)に関して、『増訂華英通語』における福沢の日本語訳と中国語原訳の関係、及び、福沢の「俗語」訳の特徴を論ずる。

A. 福沢の日本語訳と中国語原訳

既に触れたように、『増訂華英通語』の中国語訳と福沢の英語理解との間の関係は、英学史上の興味を招いているようである。福沢の訳語に関しては、以下の範囲で見ると、福沢が訳語をつけるに当って原書の中国語訳にそれ程頼らず、これに頼った場合も、英語の意味を知って、双方の一致を納得の上であったらしい。このことを、「船隻類」の194（全集第1巻）ページで調べる。このページは、そこに載せられている15の単語のうち、8語にしか日本語の訳語を与えられていないという点で特徴的である。これらの単語は以下の通り。「」は原漢字訳。（ ）は福沢訳。（×）は福沢訳がないもの。カタカナ発音表記はすべての語につけられているが省略。

1. Binnacle「船尾柵」(×) 2. Riceboat「米艇」(コブメ子) 3. Smuggler「私塩船」(バハンブ子) 4. Flower boat「花艇」(×) 5. Gun deck「二層櫃」(ナカカンパン) 6. Deck「櫃面」(カンパン) 7. Lowest deck「三層櫃」(シタカンパン) 8. Gangway ladder「船梯」(ハシゴ) 9. Fashion「尾枕」(×) 10. Fid「桅枷」(×) 11. Flag「旗」(ハタ) 12. Berth「船位」(×) 13. Capstan「絞盤」(ロクロ) 14. Cabin「船尾房」(×) 15. Cap「桅帽」(×)

各単語の訳の有無を分類して、それぞれの理由を推測してみよう。以下で「基本単語」とは、漢語の場合には『廣漢和辞典』にある単語、英語の場合には初級英和辞典にあるような単語を指す。福沢は漢語の基本単語は理解でき、英語の基本単語は、福沢の知識の中にあるか、福沢が用いた英蘭(蘭英)辞書で調べることができたとの前提に立つ。

1. 訳されていない単語のうち

(1) 漢語から英語の意味を推測できない(共に基本単語ではない)単語——9

(2) 漢語(基本単語)から英語の意味を推測できるであろう単語——

1(例えば、「船尾の柵」など。以下同様)、4(「花船」)、10(「桅」は帆柱。枷は「かせ」——意味は「帆桁」)、12(「船の位」、あるいは「船の位置」)、14(船尾にある船室)、15(帆柱の帽子、「樯」は帆柱)

それぞれの辞書(『研究社新英和大辞典』)的な意味は、1「羅針儀箱」、4(OEDやウエブスターにもなし)、9(海事用語としてはOEDにもなし。但し、fashion plate stemは、特殊な船首。)、10「帆柱止め栓」他、12「(船の)停泊位置」他、14「船室」他、15「樯帽」(マスト先端の金属環)

2. 訳されている単語のうち

(1) 英単語と漢語訳が、共に基本単語で、両者の意味が一致するもの——2、11

(2) 漢語が基本単語で、英語がそうでないもの——3

(3) 英語と漢語のいずれか、あるいは、双方の一部には基本単語を含むもの——5、6、7、8

(4) 英語も漢語も基本単語ではないもの——13

福沢がこれらの英単語を訳さなかったり、訳したりした理由は何か。1-(1)のfashionが訳されていない理由は上の説明より明白。常識にも辞書にもない。1-(2)の単語は漢語から推測して訳すことが可能(例えば、単語1を「トモノサク」、単語2を「ハナブネ」)であったにもかかわらず、訳されていない理由は、おそらく、漢字から意味を推測できても、それを英語の意味で確認することができなかったためではあるまいか。福沢が中国語の原訳に多く依頼したとすれば、1-(2)の単語が全く訳されていないことを理解できない。

既に見たように福沢は子卿の中国語の原訳を完全には信用していなかった。英語を、中国語訳を媒介して、日本語に重訳して、日本語訳は英語の訳であるとする場合(福沢がこのケースだとすると)に、日本語訳者は、日本語は勿論のこと、(1)英語と中国語に堪能であり、三か国語は同一の内容であると確認できるか、あるいは、(2)英語を知らなくても中国語には堪能であり、且つ、中国語訳を完全な英語訳であると信じられる場合であろう。福沢は(1)と(2)のいずれにも当てはまらない。したがって、福沢が子卿の原訳のみに多く頼り、日本語訳をしたとは考えられない。繰り返せば、福沢の日本語訳は、子卿の原訳を参考にしたとしても、それを英語の意味で確認した上でのものである。

次に、訳された単語のうち、2-(1)の単語が訳された理由は明確。単語2、単語11は、英語でも漢字訳でも「コメブナ」、「ハタ」である。

2-(2)のsmuggler[「私塩船」(バハンブ子)]については、福沢は漢訳に頼って英語を訳したと考えることは可能である。因に、「私塩」とは、「政府の専売品である塩を密造・密売すること」(『廣

漢和字典』)。

2-(3)の単語は漢字よりも英語に頼って(英語を知っていたか、あるいは、それが示すものを教えてもらって)訳されたのであろう。例えば、5、6、7の“deck”は基本単語であろう。しかし、「櫃」は「甲板」の意味では基本単語ではない。したがって、6“deck”から、「櫃」を媒介せずに、「カンパン」とは訳せる。しかし、“gun”は「二層」あるいは「ナカ」の意味では基本単語ではない。“lowest”も同様に、「三層」あるいは「シタ」の意味では基本単語ではない。したがって、“gun”と“lowest”を、それぞれ「二層」、「三層」を媒介して、日本語「ナカ」「シタ」と訳したとは言えない。

8の“gangway ladder”[「船梯」(ハシゴ)]は部分訳である。“ladder”と「船梯」は共に基本単語であろうが、“gangway”はそうではない。しかし、英語と漢語の双方の基本単語を知っていれば「ハシゴ」とは訳せる。しかし、“gangway”という単語が入ると、それが、「ハシゴ」の意味を変更させないことに、福沢は注意しなければならない。“gangway ladder”とは海事用語で「舷梯、タラップ」のことである。福沢は、これも誰かに確認したのではなかろうか。

2-(4)の“capstan”は英語と、漢字訳「絞盤」の双方で基本単語ではない。福沢はどのようにしてこれを「ロクロ」と訳せたのであろうか。まず、福沢が“capstan”の意味を知っていたとは思われない。海事用語の“capstan”(この日本語訳は、『研究社新英和大辞典』によれば、海事用語としての「絞盤」)の漢字での原訳は「絞盤」とされている。「絞盤」は『廣漢和字典』にも『大言海』にもない。勿論、「絞」、「盤」のそれぞれは難語ではない。福沢が「絞盤」を「ロクロ」(滑車)と訳せるためには、福沢は(1)「絞盤」を滑車の意味であると知っているか、(2)「絞」と「盤」から「滑車」の意味を推測するか、いずれかでなければならない。ここでは(1)はあり得ないという前提であるから、(2)を取ると、福沢は、capstan→「絞」「盤」→(ロクロ)のように推測で翻訳したことになる。福沢がこのような大胆な翻訳をしたとは考えられないから、capstanの意味を何らかの方法で調べたのであろうと思われる。

このように、少なくとも海事用語に関しては、福沢は、咸臨丸の船中かあるいは別のところで、誰かに教えてもらったのではないかと解釈することが自然であろう。

いずれにしても、一般的に言って、福沢は漢字から推測できるだけでは訳していないようである。そう考える理由をまとめると、まず、1-(2)の漢字から推測できるであろう単語を訳していないことである。次に、訳されている単語の大部分は、英単語の意味を直接知って、それを漢字訳で確認できるか、あるいは、漢字訳の意味を知らなくとも英訳ができるか、のいずれかである。2-(1)は、英単語と漢字訳が共に基本単語で同一の意味を持ち、意味を互いに確認できるもの。2-(3)は、英語と漢字訳の双方の一部には基本単語を含むものである。すなわち、「櫃」を媒介せずに、“deck”を「カンパン」と訳せるし、また、“ladder”を「ハシゴ」と訳してから、「船梯」でその意味を確認することができる。

もちろん、福沢が、“ladder”の意味を知らずに、「船梯」を媒介して、「ハシゴ」と訳し、また、“gangway”は漢字訳がないから、“ladder”のみを訳した、と推測することも可能である。しかし、このように推測するよりは、その意味を誰かに聞いたと推測するほうが自然であろう。このことは、次の2-(4)の単語“capstan”に一層当てはまる。“capstan”と「絞盤」のいずれも基本単語ではない。これを「ロクロ」と訳すためには、福沢が「絞盤」の意味をではなく、英語の“capstan”の意味を、誰から教えてもらったと解釈できるであろう。

(2)のうち、smuggler, deck, gangway ladder, capstan等を、福沢が、咸臨丸に同船していた中浜万次郎に確認することは、状況として可能であったろう。また、中浜の経歴(アメリカで教育

を受けた後、航海士であった)から、これらが何を意味するか知らないはずはないから、これらに関しては、福沢は中浜に聞いて訳したと推測することはできるであろう。しかし、そのように推測すると単語1、10、12、14、15の海事用語が訳されていない理由が解らなくなる。なぜならば、中浜がそれらが何かを知っていて、中浜も福沢も日本語の海事用語を知らなかったとしても、福沢は他の語と同様にそれらを一般用語(俗語)で訳せたはずであるから。例えば、“gangway ladder”を「ハシゴ」、「capstan」を「ロクロ」と、海事用語を一般用語訳したように。

B. 福沢の「俗語」訳(訳語と訳文)

1. 訳語

『増訂華英通語』の「天文類」から「三字類」までの単語や単句の訳語には、多少の無理を感じさせる程の俗語が使われている。例えば、officiels (ママ) (「仕」が原訳、以下同様)、husbandman (「農」)、merchanies (ママ) (「工」)、merchant (「商」)は、それぞれ、「サムライ」、「ヒャクショウ」、「ショクニン」、「アキンド」と訳されている。少なくとも「武士(ブシ)」、「商人(ショウニン)」は、辞書によれば、昔からあった言葉である。また、turtleに「ショウガクボウ(正覚坊)」と、わざわざ、アオウミガメの異名をつけなければならないであろうか。

また、俗語を使ったために、それぞれ異なる英語の単語が全て同じ日本語に訳されているものもある。mixed lute string、flowered lute string、figured crapeが、それぞれ、「カタツキノキヌ」、同、「カタツキチリメン」と訳されており、mixed、flowered、figuredが、全て、「カタツキ(形付き?)」とされる。同じことは、to be strangled (「門絞」)、to be hung (「門吊」)が共に「シメコロサル、」と訳されていることにも言える。この俗語のために英語にも原訳にもある「絞」と「吊(つるす)」の区別がなくなっている。

さらに、漢語を仮名で書いただけらしいものもある。例えば、civil officer (「文官」)、military officer (「武官」)、on the decision of cases (「断罪」)である。これらは、それぞれ、「ブクワン」、「ブクワン」、「サイキョ(裁許?)」とされている。

単語の訳語で、もう一つ面白いことは、「父」「母」「男」「女」などの、当時の商人でも知っていたであろう原訳の漢字に、チ、ハ、オトコ、ランナなどの日本語訳が付けられていることである。さらに、「数目類」の各語句には、「一」「二」「三」から「京」に至る原訳がつけられているにもかかわらず、(ヒトツ。イチ)(フタツ。ニ)(ミツ。サン)(センマン)の日本語訳が付けられていることである。おそらくこの日本語訳は、日本人商人にとっては不要である。すると、『増訂華英通語』が外国人のための日本語教科書であることをも目したという福沢の説明が一層の真実味を帯びてくる。さらに、福沢がこの書物に中国語の原訳を残しておいたことも、この書が中国人のための日本語教科書たらんとしたことを示すのかもしれない。

福沢の英単語の訳語はとにかく、その文章訳は、外国人のための日本語教材としては、推奨しかねる。なぜならば、余りにも「こなれ」過ぎていて、教科書にはならないからである。

2. 訳文

『増訂華英通語』の訳文を一見して気が付くことは、

- (1) ほとんど全て極め付けの俗文(話し言葉)であり、漢文調はもとより、西洋文の翻訳調は少ない。このことは、すべてカタカナ表記であり、容易な漢字さえ使っていないこと、および、いわゆる意識が多いこと、と関係しているのであろう。
- (2) 誤訳であると言い切れるものはそれ程ない。「四字類」から「長句類」の内には合計219の短文があるが、そのうち誤訳と言い切れるものは数文にすぎない。

(3) ほとんどすべての短文が訳されている。上の219の短文のうち、訳文が付けられていないものはわずかに6文に過ぎない。これらにはpicul, tail, mace等の貿易用語や、week, plantain等の一般用語が含まれている。しかし、これらは、該当する「何々類」(単語集)には載せられている。例えば、“tail”は「国宝類」で「リヤウ(両)」、 “week”は「時節類」で「ヒトマワリ」と訳されている。

まず、福沢の訳文を見る。「長句類」全8ページの各ページの冒頭の文を順次取り上げる。

1. This is just like the other. コレハ チヨウド アレニ ニテイル
2. This is the one we had before. コレ ハ マヘ ワタクシドモ ニ アッタ モノジヤ
3. His trail taks place to day. アノヒト ハ コンニチ サガサレル
4. I can't give so much. ワタクシ ハ ソレホド ダセヌ
5. Have you any work for me Sir. アナタ ニハ ワタクシ ニ サセル シゴト ハ ナイカ
6. I will send for them. ワタクシ ハ ソレ ニ ヒト ラ ヤロウ
7. Yes and read it very slowly and distinctly. ソロソロ ワカルヨウ ニ ヨメ
8. In what way shall I help let me know, if you please. ドウシテ タスケレバヨイカ シラセテ クレイ

以上、英文、訳文とも原文のままである。カタカナ発音表記は省略。訳文の付け方は、縦書きで2から5・6行。文字間は原文どおりか、私の判断による。原文の書き方の例は次の通り。/は行を変え所。

コレハ チヨウド/アレニ ニテイル

コレ ハ マヘ/ワタクシドモ/ニ アッタ モノ/ジヤ

1~8の短文とその訳文から、上の(1)~(3)に述べた福沢の訳文の特徴の(1)は明らかである。全てカタカナ表記であり、特に、文7と8に顕著なごとく、ほとんど話し言葉を用いて意識である。また、(2)と(3)も明らかであろう。各ページの冒頭からの上の文はすべて訳されているし、文1~8のうち、誤訳は3(後述)のみである。

次に、上で指摘した福沢の訳語、訳文を、当時の他の英学書の訳語、訳文と比較して、それらの特徴をさらに検討してみよう。

C. 他書との比較

1. 俗語と仮名文字

俗語と片仮名文字の使用に関して、当時の他の西洋語の教科書と比較する。まず、箕作阮甫編集出版『改正増補蛮語箋』[嘉永元(1848)年]⁸⁾には、単語の訳語は漢字であり、難字にのみカナが振られている。短文訳は漢文で、それに返点と他の訓点がつけられている。つまり『改正増補蛮語箋』の日本語はオランダ語の漢文訳である。

しかし、石橋政方『英語箋』[万延元(1860)年]の単語の訳語(漢字)には全てカタカナが振られている。例、「天(テン)」「日(ヒ)」。「日光」は「ヒノヒカリ」で俗語であるが、「月蝕」は「グワツシヨク」、「惑星(planet)」は「ア(ママ)クセイ」と漢語である。福沢訳は「月虧」は「ガツシヨク」、「行星」は「カウセイ」と漢語であり、これら単語の訳だけからは両者に大きな違いは認められない。また、後に見るように、単語を俗語で訳すことは、『和英商賈對話集 初編』、『英米對話捷徑』、『ゑんざりしことば』等でも行われている。このことから、俗語訳や片仮名自体は福沢にのみ独特なものではないようである。

2. 俗文体と翻訳文体

福沢の文体の特徴を見るために、当時の英語学習書の訳文の文体と比べて見る。まず、『和英商賈對話集 初編』⁹⁰。この書は『増訂華英通語』出版の前年である安政6（1859）年に長崎で出版された。この書は、日本人商人と外国人のためという点で、また、訳文の俗語・俗文と意識の点で、『増訂華英通語』に似ており、発音表記でイントネーションに注意を払っている点で、それと大きく異なる。

豊田 實によれば、『和英商賈對話集 初編』には次の(1)と(2)の特徴がある。

- (1) 「英語の発音をできるだけ正確に仮名文字で写そうとする努力が現われており（豊田の文を、一部書き改めた）」、カタカナ発音表記の傍らに●と▲をつけ、「●ハ弱クシテ有カ如ク無カ如シ▲ハ強くク高調ニ言フ微トス」とされている。

例 （英文横書き。かな縦書き）

Can	I	see	your	goods?	
ケン	アイ	シー	ユール	グーツ (ママ)	品ヲ見ルコトワ出来マスカ
▲	●	▲	●	●	

Certainly.		出来マス
ソイテンリ		
▲		

- (2) また、この書は、日本の商人には英語を、英語国民には日本語を学ばせようとしたものであり、「この種の動機は当時の他の会話集にも現われている（豊田）」。この点でも『増訂華英通語』とこの書は似ている。

豊田は指摘していないが、『和英商賈對話集 初編』は、さらに、次の特徴をも持つようだ。

- (3) 訳文は、上の例のように、一般的に話し言葉（俗文）であったようだ。

豊田はこの書の39ページの写真を掲載⁹¹しているが、そこに読み取れる文は以下の通りである。

That will be done with Japanese letters.	日本文字デ宜イ
And put your seal on it.	且判ヲナサレ
I can't read it and I will ask	私ニワ讀ヌカラ通詞方ニ
the interpreter to translate.	頼テ釋テモライマス
I shall follow your orders.	左様シマショー

上の訳語は、「文字」、「判」や「通詞」のように、俗語と言ってよく、また、訳文はデスマス調を主とする口語文である。さらに「左様シマショー」に明瞭に見られるように、訳文は意識である。『増訂華英通語』の意識の特徴はこの書にも見られる。

次に、『英語箋』の「会話一」と「会話二」。訳文は縦書き。英語は横書き。英文の間違い、及び、誤訳と思える箇所も原文の通り。参考のために、第1行にのみ発音表記を入れた。

会話一

ギフ	ミー	ソム	ブレード	ソム	ミート	アンド	ソールト
Give me. /	Some	bread. /	Some	meat	and	salt.	
我ニ	与ヘヨ	有ル	パンヲ	有ル	肉	及ヒ	塩ヲ

bring me. /	Some	coffee	and	tea?	
我ニ	持チ來レ	有ル	コーヒー	及ヒ	茶カ

Where is? /	Where	did	you	put?
何処ニ	有ルカ	何処ニ	汝	置キシヤ

my book? / lend me.

我ノ 書物カ 我ニ貸サレヨ

会話二

1. Where live the draper.

何処ニ羅紗屋ハ住居スルヤ

2. in that great white house next to the confectioner.

菓子店ニ隣レル其大ナル白キ家ゾ

以下は上に続く文章の日本語訳である。訳文を強調するために、それを先に記す。

3. 何タル綺麗ノ店カ (What a fine shop?)

4. 其レハ市中ノ最大ナル家デアル (it is the great of the city.)

5. 其レハ宮ノ如キ家デアル (it is a house like a palace.)

6. 我等ニ有ル羅紗ヲ見セ賜ヘ (be pleased to show us some cloth.)

これらの訳文は、福沢の俗文、意識と対比して、文語調の翻訳文体であり、直訳であると言える。この訳文体は杉本⁹⁴によれば、「[会話一、二の例文を見ると] 訳は文語調が基本として見られる。そうしたなかにも、〈……デアル／……テアル〉の訳文が基調になっていることが注目される。これも蘭文翻訳の伝統といえよう」。杉本の言うことは、『英語箋』の訳文の文体は、漢文調が基底になっている文語調で、その中にデアル調の俗文体が混ざっている、ということであろう。この訳文の文体は俗語が混じりながらも基本的には翻訳文体であり、それゆえに、いわゆる「こなれた」日本語文ではないことが窺える。

福沢の文体は『英語箋』のそれに比べると、文語（漢文）調あるいは翻訳調とは決して言えないし、さりとて「デアル」調の口語文でもない。本稿86ページに見た福沢の訳文(1)から(8)で文末特有の表現は「ジャ」だけである。福沢の訳文は、「アスマス」や「デアル」等の文末表現によって判断される俗文ではなく、文全体の調子が、基本的に俗文である。これは当時の会話体であろう。しかし、いわゆる翻訳調も認められる。「アノヒトハコンニチサガサレル」（誤訳）や「アナタニハワタクシニサセルシゴトハナイカ」（「何か仕事はないか」とすれば俗文になる）等である。

次に、福沢の文体と同様な会話体で訳されている中浜万次郎『英米対話捷徑』⁹⁵の訳文を見る。以下、原文では、訳文は縦書き。英語は横書き。英文の右に訳文。必要に応じてさらに訳文の右の行に所々漢字を入れることもある（以下の「安否類」中程ではこの漢字を（ ）内に入れる）。次にカタカナ発音表記。それから英文。訳文には、レ点や簡単な返点の一、二などが振られているが、以下では省略。誤りと思われる英語も原文のまま。

まず、会話「安否類」の冒頭。

善 日で ござる

ゲーリ デイ シヤアー

Good day sir.

如何 平 君 安

いかゞ ごきげん あなたさま よふ ござろう

ハラ ヅー ユー ヅー シヤアー

How do you do Sir?

次は、同じく「安否類」の中程、以下には原文の返点にしたがって読み下だす。単語の対訳はしない。

かれ かれのすぎしきのふ (昨日) より こんにちハ このとほか ころよくある (He is much

better to day than he was yes terday.)

かれ ふたたび ゆゑしく ぜんかい (全快) して ある かしながら 今だ はなはだ つかれてで ある (He is bravely recovered again but is very weak still.)

以上は私が原文のひらがなを読んだもので間違いがあるかもしれない。確認のために、次に、杉本⁹⁹より訳文と原文を引用する。

われわれにゆきてそうしてかれを見ることをゆる (免許) せ (Let us and see him.)

かれかならずほこふ (歩行) のけいこ (修行) をとれはよし (He must take a little exercise.)

わたくしかれをなりふり (形態) によってしれり (I know him by reputation.)

中浜の訳文は、一見して解るように、俗語・俗文と翻訳調の混交である。

さらに次は、清水卯三郎⁹⁹の『ゑんぎりしことば』の訳文。／は行の変更。

われは、しらぬ／なんぢは、それを、しるか

しづかに、はなされよ／それは、できますか

それは、かわる、ひよりなり

われは、おきんとす／われは、いえに、かへろう

なんぢ、よろしくば、すはれ／できしだい、すぐさま

清水の文体は翻訳文体であるように見える。例えば、「われは、おきんとす (アイ、エム、ゴーインド、ツ、ライス)」、「われは、いえに、かへろう (アイ、ウィル、ゴー、ホーム)」「なんぢ、よろしくば、すはれ」等。これは当時の知識人の話し言葉文体を反映しているようにも思える。しかし、「ひより」「すぐさま」等の俗語にもかかわらず、清水の文体は福沢のような「庶民」の俗文ではなく、少々「雅」な感じがする。

福沢の訳文の俗語、俗文の特徴をもう少し特定するために、限られた状況 (「英語の力を問う」と「機嫌を伺う」) のもとでの文を用いて、『増訂華英通語』と『改正増補英語箋』⁹⁹を比較して見よう。当時の英文の翻訳には一般に漢字が多く、解りにくかったことは、このように対比するとはっきりする。以下、英文、訳文ともに原文の通り。

『改正増補英語箋』

Can you speak english? (汝は英語ヲ言ヒ能フカ)

a little. (少々)

I can not speak english (我ハ英語ヲ言ヒ能ハヌ)

.....
you are very sleepy (汝ハ甚タ貧瞬ナリ)

I have pain in my head so that I can not get up. (我ハ頭ノ内ニ痛ヲ得ル其故ニ起ルコト能ハヌ)

『増訂華英通語』

Can you speak english? (アナタ ニハ イギリスコトバ ガ デキル カ)

I can't speak english. (ワタクシ ニハ イギリスコトバ ハ デキヌ)

I understand it very few. (ワタクシ ニハ ゴク スコシ デキル)

.....
Do you enjoy good health? (アナタ ハ ラタッシャ デ アルカ)

I am in excellent health. (ワタクシ ハ コトノホカ タッシャ デ アル)

I am glad to hear that you are well. (ワタクシ ハ アナタノ ゴキゲンヨイ ラ キイテ ヨロコブ)

『改正増補英語箋』と『増訂華英通語』の違いを幾つか挙げる。まず、人称代名詞の訳し方の違いである。前者の「汝」、「我」が、後者では「アナタ」、「ワタクシ」となっている。次は、助動詞の訳の違い。前者の「能フ」、「能ハヌ」は、後者では「デキル」、「デキヌ」。その他に、名詞の訳で、前者の「英語」と後者の「イギリスコトバ」、動詞の訳で、前者の「言フ」と、後者でのその省略(“speak”の意味は「コトバ ガ デキル」に込められる)、助詞の訳で、前者の「ハ」(汝ハ、我ハ)と後者の「ニハ」(アナタニハ、ワタクシニハ)、語句で「have pain in my head (頭ノ内ニ痛ヲ得ル)」と「enjoy good health (ヲタツシャ デ アル)」などを挙げられる。

しかし、強調すべきことは、『改正増補英語箋』と『増訂華英通語』の間の個々の差異よりも、むしろ、全体として言葉の使い方が異なることである。例えば、「汝ハ甚タ貧瞬ナリ」、「其故ニ」、「コトノホカ ヲタツシャ デ アル (まい)」とは、1文中では、繋がらない。両者の間には文章の質の違いとも呼ぶべきものがあるようだ。

この文章の質の違いとは、翻訳文体か俗文体かの違いだけではなく、それぞれが想定するコミュニケーションのコンテキストが違うのである。『改正増補英語箋』は英語教育というコンテキストが想定され、そこでのコミュニケーションとは、英語を教え・習うというコミュニケーションである。そこでは、文法という普遍性を想定するが、コミュニケーション上は、英語のコミュニケーションの世界と、日本語のそれとは異なり、それゆえに、英語の日本語訳は通常の日本語ではなく、西洋の「香り」を持つ翻訳文体にしなければならない。また、このことゆえに、このコンテキストで習得された翻訳文体は新たな文体を創造し得る革新的なものである。それに対して、『増訂華英通語』は、日常的なコミュニケーションを想定している。それは西洋の商人の日常的なコミュニケーションを、日本の商人のそれに移し替えたものである。西洋の商人のコミュニケーション世界と日本の商人のそれとの間には、ある種の普遍性(例えば、ともに俗世界に生きている)があることが前提とされるが、福沢の俗語訳文は、日本の商人の俗世界コミュニケーションに埋没するゆえに、保守的なものである。

『改正増補英語箋』の英語教育コンテキストと『増訂華英通語』の日常的コミュニケーションのコンテキストは、以下の対比に見られる。“can you speak english?”の訳文としての「汝ハ英語ヲ言ヒ能フカ」と「アナタ ニハ イギリスコトバ ガ デキル カ」の対比である。前者は、英語の助動詞＋主語＋動詞＋目的語に、また、英語の文法一般、及び、疑問文の文法に忠実に対応する訳文である。忠実に対応しているがゆえに、文法そのものが持つ普遍性を反映していると言える。また、それゆえに教育上の応用性を持つ。例えば、上の英文を習得した学生は、文法構造の同じ、Can he open the window?を「彼は窓をあけ能うか」と訳せる。また、それゆえに、この学生は、このような新文体を創造でき得る。

それに対して、福沢の俗文訳は、文法的な対応をしていない。「アナタニハ」は主語か目的語か明瞭ではなく、動詞“speak”は訳されていない。つまり、福沢の訳文で英語を学んだ学生は、図式的にいえば、上の英文を「カレニハマドガデキルカ」としか訳せない。福沢の訳文は文法の普遍性に立脚せず、教育的ではない。その代わりに、福沢の訳文はコミュニケーション上の普遍性に立脚する。西洋の商人世界を日本の商人世界に移し替えれば、福沢の訳文が生ずる。しかし、これは日本の商人世界のものそのものであるから、これによって日本の商人のコミュニケーションが変わることはなく、文体上は保守的である。

上に述べた『改正増補英語箋』と『増訂華英通語』の文体上の質的な差異は、両者にも見られる翻訳文体にも認められる。前者では、俗文体を使えるにもかかわらず、翻訳文体が使用されているのに対して、後者では、俗文体に為し得ないために、翻訳文体が使われているようである。例

えば、下に再度引用する、それぞれからの2文はともに訳文体である。

(1) I have pain in my head so that I can not get up. (我ハ頭ノ内ニ痛ヲ得ル其故ニ起ルコト能ハヌ)

(2) I am glad to hear that you are well. (ワタクシハアナタノゴキゲンヨイヲキイテヨロコブ)

しかし、それぞれを訳文体にしているものが違う。(1)が翻訳文体であるのは、それが慣用的な翻訳法にしたがうからであり、(2)が翻訳文体である理由は、これを日本語の俗文に訳し得ないからである。すなわち、(2)の英文のメッセージの内容を、日本語のコミュニケーションで伝える日本語が無いようである。(1)では、“that”を含む“so that…can (not)”という慣用的な語法が「其故ニ…能ハヌ」という、同じく、慣用的な訳文に訳されている。この慣用的な翻訳法を用いなければ、(1)は「頭が痛くて起きられない」と、「こなれた」俗文に翻訳することができる。

それに対して、(2)では、「キイテヨロコブ」(“I am glad to hear”)が訳文調であるのに加えて、“that you are well”が、「アナタノゴキゲンヨイヲ」と名詞句に訳されていることで、一層の翻訳調になっている。しかし、「ゴキゲンヨイ」を、例えば「快気」と漢語にして、「アナタノ快気ヲキイテヨロコブ」としても、漢文調の訳文や、より解りやすい日本語になるよりは、相変わらず英文(西洋文)の翻訳調に止まる。(2)の英文は「おげんき?それはけっこうですな」とでもする以外に「こなれた」訳し方はないのであるが、そうすると、“that”で結ばれている“I am glad to hear”と“you are well”を切り離すことになり、(2)を訳したことにはならない。要するに、この文はその内容に該当する日本語のメッセージを持たず、俗語を用いて翻訳しても、翻訳である限り、翻訳文体にならざるを得ない。

同様なことは、福沢の訳文3. His trial taks place to day (アノヒトハコンニチサガサレル)についても言える。これは誤訳である。正しくは、His trial takes place today (今日彼の裁判が行われる)であろう。この誤訳の元は、“trial”を“trail”[(残された)跡]としたことにあるらしい。いずれにしても、これは誤訳であるゆえに日本語のコンテキストが見当たらなかったであろう。ただし、上の解釈は、5. Have you any work for me Sir? (アナタニハワタクシニサセルシゴトハナイカ)という、少々の翻訳調を持つ訳文には当てはまらない。この文は、人称代名詞を省略して、例えば、「何か仕事はありませんか」と訳し得たのであるから。

以上に、『増訂華英通語』の福沢の訳語と訳文を、他の英学書に見られるそれらと比較した。福沢の訳語・訳文は、漢語の片仮名書きや翻訳調を含みながらも、基本的には俗語・俗文であると言える。当時の他の英学書に俗語・俗文がその一部に用いられたことは上に見た通りである。しかし、福沢には少々無理をしての俗語や、意識に過ぎる俗文が多く認められるようである。また、福沢の俗文は単に俗語を積み重ねた、あるいは、翻訳調ではないという意味での俗文ではなく、「俗」世界のコミュニケーションに合致するという意味での俗文のようである。したがって、福沢が「俗」世界のコミュニケーションのコンテキストを判断できなかった英文(結果的に誤訳に終わったものや、英文の語法上意識が困難なもの)には、しかたなしに翻訳調の訳文が与えられたようである。

ま と め

本論の目的は、英語の学習を開始して間もない福沢が、どのようにして、『増訂華英通語』を完成させることができたのかを理解する一助とするために、『増訂華英通語』の「音訳」と「義訳」の特徴を分析することである。その方法は、主に、同時代に出版された他の英語学習書と『増訂華英通語』の比較である。結論をまとめれば、次の(1)と(2)である。(1)「音訳」の一部には、音節の切れ

目を反映したカタカナ表記が多く認められることから、福沢がアメリカ人に、かなりの数の英語の単語を発音してもらって、しかも音節毎に発音してもらって、それをカタカナで書き取ったことが推測される。しかし、これほど「正しい」英語音の聴き取りと書き取りが、初学者の福沢に、どのようにして、できたのかは未だ不可解である。(2)福沢の「義訳」は、漢文調、翻訳調からかなり解放された俗語・俗文体での意識であり、かつ、英文の大意と合致しているものが多い。このような翻訳は、一般的には、英語学習の上級者にでき得るものである。初学者であった福沢に、なぜこのような翻訳ができたのか、これも同じく、未だに不可解である。

以下に、本稿の序説から第3節までの内容を略記する。まず、序節において、福沢自身も後の研究者も、福沢がVの音をウワに濁点をつけて表示したことに注意を払っているが、それよりも、小文字表記や「ヌ」での表記が、英単語の音節の切れ目に合致していることから、これらのほうがはるかに重要であることを指摘した。

第1節では、『増訂華英通語』の構成を分析して、「天文類」や「地理類」の項目が、先頭に置かれていることは他の類書と同じであるが、これらに続き「職分類」が置かれていることは、他書に見られないことであり、福沢が「職分類」に含まれる単語に興味を持っていたことが推測される。福沢は「職分類」中の単語を訳すことは難しかったようである。約半数の単語には訳語が与えられていない。しかし、他方、これらの単語の全てにカタカナ発音は与えられている。このことは、福沢が英単語をアメリカ人に発音をさせて、それを書き取ったのではなかろうかと推測させる。福沢のアメリカ滞在中の勉強とはこのことではなかったのか。「職文類」はこの意味で独特であり、研究対象とするに値する。

第2節では、序節と第1節をうけて、福沢の音訳の特徴を、「天文類」、「地理類」および「職分類」の単語のカタカナ表記を分析することで、特定した。まず、「天文類」と「地理類」から、音訳の一般規則を仮説的に取り出し（アペンディクスA）、次に、その規則を「職分類」の単語のカタカナ表記に当てはめて、両者の間の齟齬を分析する（アペンディクスB）と、福沢の発音表記の小文字や「ヌ」は、多くの場合に、英語の音節の切れ目に合致していることが解る。このことは、福沢がアメリカ人の発音を聞きながら、これをカタカナに書き取ったのではないかとの推測を支持する。しかし、よく知らない外国語の発音をカタカナで表記することは至難の技である。上のように推測しても、福沢はどのようにしてこの表記を可能にしたのかは、不可解である。

第3節では「義訳」（訳語・訳文）を、『増訂華英通語』の「凡例」にしたがい、次の二つのこと(1)「義譯は主として英語の意を存す」、及び、(2)「義譯の語は鄙俚を厭はず、勉めて俗語を用ひ」を中心に論じた。まず、(1)に関して、『増訂華英通語』の「船隻類」における福沢の日本語訳と中国語原訳の関係を調べ、福沢は英語を解釈するに当たって、それ程中国語訳に依存しなかったであろう、むしろ、解らない単語は誰かに、その英語の意味を直接聞いたのではなかろうか、とした。つまり、福沢が(1)で言うことは正しいようである。さらに、(2)に関して、福沢が「勉めて俗語を用ひ」たことは事実であり、少々の無理を感じさせるほどの、俗語訳や意識がなされている。俗語・俗文訳自体は福沢独特のものではないし、福沢にも翻訳調の訳文は認められる。

しかし、福沢の俗文は、文章の一部を俗語にするような俗文ではなく、日本語の俗語の話し言葉（例えば、当時の知識人や庶民の話し言葉）コミュニケーションの体系を全体的に反映しているらしい。したがって、福沢がよく理解できなかったり、日本語の話し言葉の体系には訳し得ない英文は、この体系を離れて、翻訳調で訳（誤訳）されていることが認められる。

注

- (1) 『福沢諭吉全集』第一巻、岩波書店。
- (2) 『福沢諭吉選集』第十巻、岩波書店。
- (3) 川澄哲夫編『中浜万次郎集成』小学館、1990、pp. 90 - 92.
- (4) 例えば、茂住實男『洋語教授法史研究』学文社、1989、p. 231.
- (5) ここで簡略版と呼んだ「抄略版」については、会田倉吉『福沢諭吉——その人と生活』日新報道、昭和45年、pp. 83 - 84 参照。
- (6) 山本正秀（『近代文体発生の史的研究』岩波書店、1982、p. 66）によれば、福沢が緒方塾でのオランダ語の学習で使用した蘭日辞書『道訳法爾馬（ズーフハルマ）』の「緒言」には、「辞書を訳するには必ず質実なる語を以てする事を要す」「是によって此辞書を訳するは勉めて語の本意に随て鄙俗なるをいとはず」とされ、訳文は平易な俗語が書かれていたという。例えば、「正月ガヤガテ来ルデアラフ」「彼等ハ昼夜酒ヲ飲ンテ居ル」（共にオランダ文省略）。
また、杉本つとむ（『長崎通詞物語』創拓社、1990、pp. 261 - 262）によれば、この『ドウーフ・ハルマ』は、約7万語を収録し、熟語や例文なども豊富であり、現在でも使用に耐える辞典であり、さらに、同じく杉本（『江戸洋学事情』八坂書房、1990、p. 4）によれば、幕末に將軍侍医桂川一門が『ドウーフ・ハルマ』を『和蘭字彙』として出版刊行（1858）したが、『和蘭字彙』は、見出し語約5万語、用例文約5万、総ページ3,773である。福沢がかなり大部の英蘭辞書を使用できたとすれば、『ドウーフ・ハルマ』（写本）や『和蘭字彙』を用いて、英語を蘭語に訳し、さらにその蘭訳を日本語の俗語に訳すことは可能であったかもしれない。
しかしこの推測には幾つかの難点があり、例えば、福沢が用いたとするホルトロップの蘭英・英蘭辞書は、福沢によれば、小さいものである。また、これが大部のものであったとすれば、幾つかの基本単語（例えば、キニーネ）が訳されていないのはなぜか、等の疑問が生ずることである。
- (7) 土橋俊一校訂・校注『福翁自伝付福沢全集緒言』講談社文庫、1989。
- (8) 『考証福沢諭吉上』岩波書店、1992、173 - 176。
- (9) 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』八坂書房、1985、pp. 262 - 267.
- (10) 高梨健吉・大村喜吉『日本の英語教育史』大修館書店、1977。
- (11) 茂住實男『洋語教授法史研究』学文社、1989。
- (12) 私が参照できたものは以下である。これらは会田倉吉（前掲書）、『福沢諭吉年鑑』の研究論文目録、及び、慶応義塾福沢研究センターの松崎欣一氏のご教示による。
岩井大慧「辞書田落ち穂拾い」『読書春秋』第6巻第11号、昭和30年11月1日。
岩井大慧「増訂華英通語に表はれた福沢諭吉の思想の一断面」『神田博士還暦記念書誌学論集』昭和32年11月5日。
可児弘明「華英通語スタイルの辞書」『福沢手帳』47号、昭和60年12月。
長尾正憲「福沢諭吉と洋学」『洋学史研究』1992。
松原秀一「福沢諭吉の英語」『学燈』84巻4号、昭和62年4月。
松原秀一「デュボワ博士と増訂華英通語のこと」『福沢手帳』72号、平成4年3月20日
和田博徳「『増訂華英通語』の原本」『三色旗』第169号、昭和37年4月1日。
- (13) 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』、p. 252.
- (14) 杉本つとむ『日本英語文化史資料』八坂書房、1985、pp. 131 - 163.
- (15) 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』、pp. 252 - 253.
- (16) 同。

- (17) 杉本つとむ『日本英語文化史資料』, pp. 27 – 105. 同じく、杉本『日本英語文化史の研究』, p. 249 および p. 252.
- (18) 『日本英学史の研究』岩波書店、昭和16年、p. 176.
- (19) 例えば、松原秀一「福沢諭吉の英語」『学燈』84巻4号、昭和62年4月.
- (20) 和田博徳「『増訂華英通語』の原本」『三色旗』第169号、昭和37年4月1日。
- (21) 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』, pp. 312 – 324. および、『日本英語文化史資料』, pp. 131 – 163 (『えんぎりしことば』の複製)。
- (22) 杉本つとむ『日本英語文化史資料』 pp. 221 – 237.
- (23) 『改正増補英語箋』と『英米対話捷徑』は、ともに、杉本つとむ『日本英語文化史資料』。
- (24) 『英語箋』は、杉本つとむ『日本英語文化史の研究』, pp. 230 – 234.
- (25) 杉本つとむ『日本英語文化史資料』 p. 27 以下.
- (26) 豊田 實『日本英学史の研究』岩波書店、昭和16年4月30日 (改訂第1刷), pp. 171 – 172. (この書は昭和38年に千城書房によっても出版。)
- (27) 同、p. 171.
- (28) 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』, p. 244.
- (29) 杉本つとむ『日本英語文化史資料』 pp. 107 – 129.
- (30) 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』, p. 154.
- (31) 同、p. 322.
- (32) 杉本つとむ『日本英語文化史資料』 p. 294.

アベンディクスA

アベンディクスAとBは『増訂華英通語』の音訳の調査である。この調査の目的は、福沢の英語発音のカタカナ表記(音訳)の特徴を知ることである。アベンディクスAは「天文類」30語を用いての予備調査と、「地理類」45語を用いての追加調査から引き出された、福沢の音訳の仕方に関する仮説的な一般則を取り扱う。以下、

- (1) 『増訂華英通語』の英単語の頭文字はすべて大文字であるが、アベンディクスAでは固有名詞以外は小文字で綴り始める。
- (2) 正しくない英語のスペルや表記も『増訂華英通語』の通りとし、必要な場合にはその旨記す。

I. 「天文類」30語における予備調査

以下の単語とカタカナ表記が「天文類」の単語と、福沢の音訳である。

heaven (ヒーヴス) / celestial (セレスチール) sphere (スフハール) / sun (ソヌ) / moon (ムース) / Venus (ヴェヌス) / Jupiter (ジュピタル) / Mercury (マルキュリ) / Mars (マルス) / Saturn (セータルス) / planet (プラヌト) / wind (ウキヌド) / cloud (クラウド) / rain (レーヌ) / rainbow (レーヌボー) / thunder (ソヌダル) / lightning (ライトニン) / air (エアール) / weather (ウェーザル) / dew (ヂュー) / fog (フォグ) / mist (ミスト) / hoarfrost (ホーアルフロスト) / snow (スノー) / hail (ヘール) / ice (アイス) / sleet (スリート) / halo (ヘーロー) of (ヲフ) the (ズキ) sun (ソヌ) / star (スタル) / light (ライト) / eclipsed (エクリプスド) / of (ヲフ) the (ズキ) moon (ムース)

1. 子音

以上の30語の子音がどのようにカタカナ表記されているかを調べる。表A1の左の欄の「子音」の表記はウエブスター式を用いる。右の欄は福沢のカタカナ表記である。「語頭」「語中」「語尾」とは英語スペリングのそれであって、音節ではない。

表A1

子音	福 沢 の カ タ カ ナ 表 記		
	語 頭	語 中	語 尾
b	—	レーヌ <u>ボ</u> ー	—
ch	—	—	—
d	<u>ヂ</u> ュー	ソヌ <u>ダ</u> ル	ウキヌ <u>ド</u> /クラウ <u>ド</u> エクリ <u>プ</u> ス <u>ド</u>
f	<u>フ</u> ョグ/ <u>フ</u> ロスト	ス <u>フ</u> ハール	ラ <u>フ</u>
g	—	—	<u>フ</u> ョグ
h	<u>ヒ</u> ーヴヌ/ <u>ホ</u> ーアル <u>ハ</u> ール/ <u>ハ</u> ーロー	—	—
hw	—	—	—
j	<u>ジ</u> ューピタル	—	—
k	<u>ク</u> ラウ <u>ド</u>	マル <u>キ</u> ューリ/ <u>エ</u> クリ <u>プ</u> ス <u>ド</u>	—
l	<u>ラ</u> イトニ <u>ン</u> / <u>ラ</u> イト	セ <u>レ</u> スチール/ <u>プ</u> ラ <u>ッ</u> 子 <u>ト</u> / ク <u>ラ</u> ウ <u>ド</u> / <u>ス</u> リ <u>ー</u> ト/ エクリ <u>プ</u> ス <u>ド</u> / <u>ハ</u> ー <u>ロ</u> ー	<u>ハ</u> ール
m	<u>ム</u> ーヌ/ <u>マ</u> ル <u>キ</u> ューリ <u>マ</u> ルス/ <u>ミ</u> スト	—	—
n	—	ソヌ <u>ダ</u> ル/ <u>ヴ</u> ェヌ <u>ス</u> プ <u>ラ</u> ッ子 <u>ト</u> / <u>ウ</u> キヌ <u>ド</u> ラ <u>イ</u> トニ <u>ン</u> / <u>ス</u> ノ <u>ー</u>	<u>ヒ</u> ー <u>ヴ</u> ヌ/ <u>ソ</u> ヌ/ <u>ム</u> ー <u>ヌ</u> セー <u>タ</u> ル <u>ヌ</u> / <u>レ</u> ー <u>ヌ</u>
(ing)	—	—	ラ <u>イ</u> トニ <u>ン</u>
p	<u>プ</u> ラッ子 <u>ト</u>	<u>ジ</u> ュー <u>ピ</u> タル/ <u>エ</u> クリ <u>プ</u> ス <u>ド</u>	—
r	<u>レ</u> ーヌ	<u>フ</u> ロスト/ <u>ス</u> フハール/ マル <u>キ</u> ューリ/ <u>マ</u> ルス/ セー <u>タ</u> ル <u>ヌ</u>	<u>ジ</u> ュー <u>ピ</u> タル/ <u>エ</u> ー <u>ア</u> ル/ ウ <u>エ</u> ー <u>ザ</u> ル/ <u>ソ</u> ヌ <u>ダ</u> ル/ ス <u>タ</u> ル
s	セ <u>レ</u> スチール/ <u>ス</u> フハール ソヌ/ <u>セ</u> ー <u>タ</u> ル <u>ヌ</u> / <u>ス</u> ノ <u>ー</u> ス <u>リ</u> ー <u>ト</u> / <u>ス</u> タル	<u>ミ</u> スト/ <u>フ</u> ロ <u>ス</u> ト/ エクリ <u>プ</u> ス <u>ド</u> セ <u>レ</u> スチール	<u>ヴ</u> ェヌ <u>ス</u> / <u>マ</u> ルス/ <u>ア</u> イ <u>ス</u>
sh(<u>shy</u>)	—	—	—
t	—	セ <u>レ</u> スチール/ <u>セ</u> ー <u>タ</u> ル <u>ヌ</u> / ラ <u>イ</u> トニ <u>ン</u> / <u>ジ</u> ュー <u>ピ</u> タル/ ス <u>タ</u> ル	プ <u>ラ</u> ッ子 <u>ト</u> / <u>ミ</u> スト/ <u>フ</u> ロ <u>ス</u> ト ス <u>リ</u> ー <u>ト</u> / <u>ラ</u> イ <u>ト</u>
th(<u>thin</u>)	ソヌ <u>ダ</u> ル	—	—
th(<u>then</u>)	<u>ズ</u> キ	ウ <u>エ</u> ー <u>ザ</u> ル	—
v	<u>ヴ</u> ェヌ <u>ス</u>	<u>ヒ</u> ー <u>ヴ</u> ヌ	—
w	<u>ウ</u> キヌ <u>ド</u> / <u>ウ</u> エー <u>ザ</u> ル	—	—
y(<u>yard</u>)	—	—	—
z(<u>zone</u>)	—	—	—
zh(<u>vision</u>)	—	—	—

仮説1-1

以上の子音に関する予備調査の結果を常識によって拡大して、次の(1)と(2)からなる仮説を立てる。(1)は基本的に、いわゆるローマ字読みであり、福沢自身が指摘するnとvの表記を除いて、特に注目することはない。しかし、(2)は音節の点から注目に値する。

(1) 子音は一般に以下のようにカタカナ表記される。

- b バ行 (左の読み方: 子音bは後続の母音によってバ行のカタカナで表記される —— 以下同様);
 ch ー; d ヂ (語頭)、ダ (語中)、ド (語尾); f フ;
 g ガ行; h ハ行; hw ー; j ジャ、ジュ、ジョ; k カ行 (スベルcを含む); l ラ行; m マ行; n ヌ, その他のナ行; ng ン; p パ行; r ラ行; s サ行 (スベルcを含む); sh ー;
 t タ行; th (清音) ソ; th (濁音) ズ、ザ; v ヴ; w ウ; y ー; z ー; zh ー

(2) 以下は語尾の表記が工夫されているもの。

(a) 語尾のt/dは小さく表記される。

- t プラッ子ト ミスト フロスト スリート ライト (例外ライトニン)
 d ウキスド クラウド エクリプスド

(b) 語中、語尾のnは〈ヌ〉と表記される。

- 語中 ソヌダル ヴエスヌ ウキスド (例外 プラッ子ト／ライトニン／スノー)
 語尾 ソヌ ムース セータルヌ レース ヒーヴス

(c) 語尾er/ar/irは、スペリングにかかわらず、子音+アルと表記される。

- ウエーザル ソヌダル スタル エーアル

2. 母音

以下は、「天文類」の各単語のスペリング中の母音(二重母音、半母音等を含む)がどのようにカタカナ表記されているかを調べたものである。表A2は、(子音)+母音が福沢の表記ではどのように行われているかを示したものである。表の読み方の例: 母音aの「プラッ子ト」において、“planet”の[la]がくらと表記されている。

表A2

母音	福 沢 の 表 記
a	<u>プラ<u>ッ</u>子<u>ト</u></u> <u>ス<u>タ</u>ル</u> <u>ヘ<u>ー</u>ロ<u>ー</u></u> <u>セ<u>ー</u>タル<u>ヌ</u></u>
e	<u>エクリ<u>プ</u>ス<u>ド</u></u> <u>ヴ<u>エ</u>ス<u>ヌ</u></u> <u>プラ<u>ッ</u>子<u>ト</u></u> <u>セ<u>レ</u>ス<u>チ</u>ール</u> <u>スフ<u>ハ</u>ール</u> <u>マ<u>ル</u>キ<u>ュ</u>ーリ</u> <u>ジュ<u>ー</u>ビ<u>タ</u>ル</u>
i	<u>ミス<u>ト</u></u> <u>エクリ<u>プ</u>ス<u>ド</u></u> <u>ウ<u>キ</u>ス<u>ド</u></u> <u>ライ<u>ト</u></u> <u>ジュ<u>ー</u>ビ<u>タ</u>ル</u> <u>アイ<u>ス</u></u>
o	<u>フロ<u>ス</u>ト</u> <u>ヘ<u>ー</u>ロ<u>ー</u></u> <u>ヲ<u>フ</u></u>
u	<u>ジュ<u>ー</u>ビ<u>タ</u>ル</u> <u>ソ<u>ヌ</u></u> <u>ソ<u>ヌ</u>ダ<u>ル</u></u> <u>ヴ<u>エ</u>ス<u>ヌ</u></u> <u>マ<u>ル</u>キ<u>ュ</u>ーリ</u> <u>セ<u>ー</u>タル<u>ヌ</u></u>
ai	<u>レ<u>ー</u>ス</u> <u>エ<u>ー</u>アル</u> <u>ヘ<u>ー</u>ル</u>
ea	<u>ウ<u>エ</u>ーザ<u>ル</u></u> <u>ヒ<u>ー</u>ヴ<u>ン</u></u>
ee	<u>スリ<u>ー</u>ト</u>
ew	<u>ヂ<u>ュ</u>ー</u>
ia	<u>セ<u>レ</u>ス<u>チ</u>ール</u>
oa	<u>ホ<u>ー</u>アル</u>
oo	<u>ム<u>ー</u>ス</u>
ou	<u>クラ<u>ウ</u>ド</u>
ow	<u>ボ<u>ー</u></u> <u>ス<u>ノ</u>ー</u>
y	<u>マ<u>ル</u>キ<u>ュ</u>ーリ</u>
(ing)	<u>ライ<u>ト</u>ニ<u>ン</u></u>

仮説1-2

以上の母音に関する予備調査の結果を常識によって拡大して、次の(1)と(2)よりなる仮説を立てる。(1)に関する特記事項は、すべての母音は長音化する傾向があること、及び、2つの重なる母音はすべて長音となること。(2)は仮説1-1-(2)の語尾表記を母音の観点から見たものであり、内容は基本的に重複する。

(1) 各母音は右欄のごとくカタカナ表記される。

a : 子音+ア、長音 (左の読み方——aは子音+ア、あるいは、長音で表記される。例：スタル (star)、ヘロ (halo))

e : 語頭でエ、語中で子音+エまたはア (マルキューリ)、長音

i : 子音+イ、アイ

o : 語頭でオ (ヲ)、語中で子音+オ、長音

u : 子音+オ (ソヌ) またはア (セタルヌ)、長音 (ヂュー)

ai, ea, ee, ew, ia, oa, oo, ow : 長音

ou : 子音+アウ

y 子音+イ

(ing) ニン

(2) 語尾に母音を含む以下の音節は、/ル/あるいは/アル/とされる。

r e : sphere (スフハール)

e r : Jupiter (ジューピタル) thunder (ソヌダル) weather (ウエーザル)

i r : air (エーアル)

a r : star (スタル) hoar (ホーアル)

II. 「地理類」45語・句による追加調査

上記仮説1-1 (子音) と1-2 (母音) を、「地理類」45語を用いて追加調査を行い、福沢のカタカナ表記の一応の一般則を引き出そうとする。「地理類」45語の単語とそのカタカナ表記は以下の通り。

Earth (イアルス) /terrestrial (タレストリアル) sphere (スフハール) /chart (チャールト) /continent (コヌチ子ヌト) /island (アイラヌド) /peninsula (ペニヌシューラ) /isthmuse (イスムス) /cape (カープ) /coast (コースト) mountain (マウステヌ) /plain (プレーヌ) /ocean (ラーシーヌ) /the (ズキ) Atlantic (エトレヌテク) /the (ズキ) Pacific (ベシフキク) /the (ズキ) Indian (インヂェヌ) /the (ズキ) Arctic (アルクチク) /the (ズキ) Antarctic (エヌタルクチク) /sea (シー) /gulf (ゴルフ) /bay (ベー) /strait (ストレート) /lake (レーキ) /river (リーヴル) /hill (ヒル) /hill (ヒル) country (カラヌトリ) /flat (フレット) country (カラヌトリ) /barren (バルレス) land (ラヌド) /rich (リチュ) /land (ラヌド) /desert (ヂザルト) place (プレーヌ) /paddy land (ラヌド) /city (シチ) /town (タラヌ) /district (ヂストリクト) /villegge ママ (ヴェルレジ) /capital (カピタル) /county (カラヌチ) /country (カラヌトリ) /road (ロード) or way (ウエー) /high (ハイ) way (ウエー) /voyage (ヴァーエジ) /road (ロード) by (バイ) land (レヌド) /tide (タイド) /slack (スレッキ) water (ウワータル) /shoal (シヨール) water (ウワータル) /fountain (フハラステヌ)

1. 子音

以下の表には、予備調査の範囲に含まれていないもの、及び、仮説1-1に合致しないもののみを記入する。例えば、子音bに関して、予備調査では語中の「レーヌボー」のみを記してあるが、この追加調査では語頭の「ベー」を追加する。しかし、語中の「レーヌボー」は記入しない。また、「地理類」の中の「コヌチ子ヌト」の語頭の子音k (コ)、語中の子音t (チ)、及び語尾の子音t (ト) は既に仮説1-1で一般化されているので以下の表には記入しない。備考欄は仮説1-1の確認、あるいは、[] 内に仮説1-1の拡張、あるいは訂正。

表 A 3

子音	福 沢 の 表 記			備 考
	語 頭	語 中	語 尾	
b	ベー	—	—	バ行
ch	チャールト	—	リチュ	[チャ、チュ]
d	—	イン <u>エ</u> ヂ <u>エ</u> ヌ	ベ <u>ヂ</u> /ロー <u>ド</u>	ヂ (語頭)、ダ (語中)、 ド (語尾) [語中、語尾 ギ、ド]
j	ヴ <u>キ</u> ルレ <u>ジ</u> (ge)		ヴ <u>ョ</u> ーエ <u>ジ</u> (ge)	ジャ、ジ、ジュ
k			スレ <u>ッ</u> キ (ck)	カ行
s		イス <u>ッ</u> ムス/ベニス <u>シ</u> ューラ		サ行 [シユ]
sh	シ <u>ョ</u> ール			シャ [シヨ]
t			カ <u>ラ</u> ヌ <u>チ</u> (ty)	タ行
th		イス <u>ッ</u> ムス	イ <u>ア</u> ル <u>ス</u>	ソ、ス、[ッ?]
v		リー <u>ヴ</u> ル		ヴ、[ヴ]
y			カ <u>ラ</u> ヌ <u>チ</u> (ty)	
z		ヂ <u>ザ</u> ルト		[ザ]

仮説2-1——仮説1-1を追加調査で補充 ([] 内) したもの。

(1) 子音は一般に以下のようにカタカナ表記される

b バ行; ch [チャ、チュ];

d ギ (語頭)、ダ (語中)、ド (語尾)、[語中、語尾ギ、ド]; f フ; g ガ行;

h ハ行; hw —; j ジャ行; k カ行; l ラ行; m マ行; n ナ行;

(ing) ン; p パ行; r ラ行; s サ行 [シユ];

sh シャ、シユ、[シヨ]; t タ行; th ソ、ス、[ッ?]; th ズ、ザ;

v ヴ、[ヴ]; w ウ; y —;

z ザ; zh —

(2) 以下では語中、語末の表記が小文字でなされる [1-1-(2)に同じ]

(a) 語末の t/d は小さく表記される。

(b) 語中、語末の n は <ヌ> と表記される。

(c) 語尾 er/ar/ir は、スペリングにかかわらず、子音+アルと表記される。

(3) スペリングで同じ子音が重なる時のカタカナ表記の仕方は、カタカナが1個の場合とカタカナを重ねる場合がある (「地理類」)。

(a) カタカナが1個の場合

terrestrial (タレストリアル) / hill (ヒル) / paddy (ベヂ)

(b) カタカナを重ねる場合

villeg (ヴキルレジ) / barren (バルレヌ)

但し、planet (プラヌ子ト) —— <n> が「ヌ子」とナ行の2音で読まれている。また、isthmuse (イスッムス) —— <s> と <th> は共に「ス」と表記されるが、<th> が促音とされている。ただし、この英単語では通常 <th> は発音されないであろうから、この場合に、<th> を「ス」とすることは誤解かもしれない。

2. 母音

母音に関する仮説1-2に基づいて「地理類」の単語を配分する。[] 内が「地理類」で初めて出てきたカタカナ表記の方法。

表 A 4

a	a; 子音+ア: <u>アイラ</u> ヌド、 <u>バル</u> レス、 <u>ラ</u> ヌド、 <u>カ</u> ピタル a; アの長音: <u>チャ</u> ールト、 <u>カ</u> ープ [a; 子音+エ: <u>ペシ</u> フェク、 <u>ペ</u> ヂ、 <u>レ</u> ヌド、 <u>スレ</u> ッキ。 a; エの長音: <u>レ</u> ッキ、 <u>プレ</u> ンス。 a; オの長音: <u>ウ</u> ォータル。 a; 語頭、語中でア: <u>アル</u> クチク、 <u>イ</u> アルス。 a; 語頭、語中でエ: <u>エ</u> ト <u>レ</u> ヌチク、 <u>エ</u> ヌタルクチク、 <u>ウ</u> ォー <u>エ</u> ジ]
e	e; 語頭でエ: ー e; 語中で子音+エまたはオ: <u>タ</u> レストリール、 <u>コ</u> ヌチ子ヌト、 <u>ペ</u> ニヌシューラ e; 長音: <u>ス</u> フハール [e; 語頭または語中でイ: <u>イ</u> アルス、 <u>ヂ</u> ザルト]
i	i; 子音+イ: <u>コ</u> ヌチ子ヌト、 <u>ペ</u> ニヌシューラ i; アイ: <u>アイ</u> ラヌド、 <u>ハ</u> イ、 <u>タイ</u> ド (語頭または語中) [i; 語頭でイ: <u>イ</u> スツムス。 i; 長音: <u>リ</u> ーヴル]
o	o; 語頭でオ (ヲ): ー o; 語中で子音+オ: <u>コ</u> ヌチ子ヌト o; 長音: <u>ラ</u> ーシーヌ
u	u; 子音+オまたはア: <u>ゴ</u> ルフ u; 長音 (ユ): ー [u; 子音+ウ: <u>イ</u> スツムス]
ai, ea, ee, ew, ia, oa, oo, ow; 長音:	ai: <u>プレ</u> ンス、 <u>スト</u> レート、ay: <u>ペ</u> ー、 <u>ウ</u> ェー [但し、tain: <u>マウ</u> ヌテヌ、 <u>フハ</u> ラヌテヌ] ea: <u>ラ</u> ーシーヌ、 <u>シ</u> ー ee: ー ew: ー ia: <u>タ</u> レストリール [但し、ia; エ: <u>イン</u> ヂエヌ] oa: <u>コ</u> ースト、 <u>ロ</u> ード、 <u>シ</u> ョール oo: ー ou: ー
ou	ou; 子音+アウ: <u>マウ</u> ヌテヌ [oun; ヲヌ: <u>カラ</u> ヌトリ、 <u>カラ</u> ヌチ、 <u>フハ</u> ラヌテヌ; ow <u>タ</u> ラヌ]
y	y; 子音+イ: <u>カラ</u> ヌトリ、 <u>カラ</u> ヌチ
(ing)	ing; <u>ニン</u> : ー

仮説2-2——仮説2-1を上記により補充（[] 内）したもの。

a 子音+ア：アの長音：[子音+エ：エの長音：オの長音：語頭、語中でア：語頭、語中でエ]

e 語頭でエ：語中で子音+エまたはオ：長音：[語頭または語中でイ]

i 子音+イ：アイ：[語頭でイ：長音]

o 語頭でオ（ヲ）：語中で子音+オ：長音

u 子音+オまたはア：長音（ユ）：[子音+ウ]

ai, ea, ee, ew, ia, oa, oo, owはすべて長音、

[但し、ai <エ>：例 マウステヌ、ia <エ>：例 インヂエヌ]

ou 子音+アウ

oun ラス：カオストリ、カオスチ、フハオステヌ；但し、マウステヌ：

ow ヲ（タヲヌ）

y 子音+イ

(ing) ニン

Ⅲ. 福沢のカタカナ表記の特徴

上記2-1と2-2が、福沢のカタカナ表記の一応の一般則であると考えられるが、その特徴は次の通りである。

1. 子音

(1) 語尾t/dを小文字で表記する。

(a) t：プラッ子ト ミスト フロスト スリト ライト

(b) d：ウキヌド クラウド エクリプスド

(2) nの音をヌ、ニ・ノ、ン（ing）と区別した。

(a) 語尾ヌ：ソヌ ムヌ セータルヌ レーヌ ヒーヴヌ

(b) 語中ニ・ノ：ライトニン スノー

(c) ingン：ライトニン

(3) 語尾er/ar/irを「ル」、「アル」と小さく表記する。

ウエーザル、ソスダル/スタル/エーアル

2. 母音

(1) スベルaを子音+エ、および長音で表記する。

a；子音+エ：ベシフェク、ベヂ、レヌト、スレッキ

a；アの長音：チャールト、カーブ

a；エの長音：レーキ、プレース

a；オの長音：ウォータル

(2) 母音が2個続けてスベルされる時は長音として表記する。

ai, ea, ee, ew, ia, oa, oo, ow, ay

(3) カタカナ小文字表記は音節の切れ目に合致している（但し、例外もある）。

(a) 語尾の音節er/ar/ir/tain

ジューピタル（Ju-pi-ter）、ソスダル（thun-der）、ウエーザル（wea-therが音声上の音節。weath-erは表記上の音節。）

(b) 語中の小文字表記

バルレス（bar-ren）、マルクユーリ（Mer-cu-ry）、ライトニン（light-ning）、ホーアルフロスト（hoar-frost）、プラッ子ト（plan-et）、ヴィルレジ（vil-lege）

(c) スペリング中で同じ子音が重なる場合のカタカナ表記。

ーカタカナを重ねる場合は、強音節＋弱音節。

villege (ヴェルレジ) : /vi - lij/

barren (バルレス) /bar - en/

planet (プラッ子ト) /pla - nət/

isthmuse (イスッムス) : is - məs/

例外 : paddy (パヂ)

ーカタカナが1個の場合は、弱音節＋強音節、あるいは1音節の語。

terrestrial (タレストリール) : /tə - res/ hill (ヒル)

アベンディクスB

アベンディクスBは、アベンディクスAで仮説的に析出した福沢のカタカナ発音表記の一般則を『増訂華英通語』の「職分類」(48語・句)へ適用した結果を示すものである。この適用の目的は、福沢のカタカナ表記の仮説的な一般則をより精緻なものとするのではなく、この一般則から逸脱するものを「職分類」の中の単語に見だし、逸脱の理由を推測することである。

以下の表B1で、「順序」とは「職分類」に記されている単語の順序である。「原語」とは英単語のこと。「一般則」とは、アベンディクスAの仮説的な一般則におおむねしたがう原語のカタカナ表記で、平井によるものである。「福沢」とは、福沢自身によるカタカナ表記。一般則からの逸脱に下線を施し、備考欄に簡単な説明を記す。備考欄中の「(ほぼ) 規則どおり」とは、福沢のカタカナ表記が左の一般則に(ほぼ)したがったものであることを示す。

表B1

順序	原 語	一 般 則	福 沢	備 考
1	official Tittles	オ(フ) フキシール チトトルス	オ <u>ッ</u> ヒシール チ <u>ッ</u> トルス	ff [ッヒ] ttは促音 Tittles (誤)
2	Duke	ヂュク	ヂ <u>ユ</u> ク	アクセント?
3	Marquis	マルクキス	マルク <u>ウ</u> キス	/ma : r - kwəs/kwəsのw に注意。wはスベルに無
4	Count	カオヌト	カオヌト	規則どおり
5	Earl	イ(ー) ルル	イ <u>ー</u> アル	rlでル1文字?
6	Baron	バ(ベ) ロヌ	<u>バ</u> ールロヌ	/bar - ən/アクセント?
7	Emperor	エムペロル	エムペ <u>ラ</u> ル	orはオルと決まらず
8	King	キン	キン	規則どおり
9	Queen	クウキース	クウキース	規則どおり qwクウ
10	Prince	プリヌス	プリヌス	規則どおり
11	Princess	プリヌセス	プリヌ <u>シ</u> ス	アクセント?
12	Courtier	クールチール	コ <u>ー</u> アルチ <u>ー</u> アル	/cour - tier/音節?
13	Imperial guard	イムペリアル グアールド	イム <u>ピー</u> リ <u>エ</u> ル <u>ゴ</u> アールド	アクセント? 〈ゴーアールド〉発音
14	Prime minister	プリム ミニスタル	プ <u>ライ</u> ム ミニスタル	〈アイ〉発音 規則どおり
15	Great	グレート	グレート	規則どおり

順序	原 語	一 般 則	福 沢	備 考
	assistant	ア(エ)スシスタ(タ)スト	エ <u>シ</u> ステスト	ほぼ規則どおり
16	Chief of the literati	チーフ ラフ ズキ リテラチ	チーフ ラフ ズキ リテ <u>レー</u> チ	規則どおり /li - tə - rā - tē/
17	Governor	ゴヴェルヌオル	ゴ <u>ヴ</u> ルノアル	gə - vər - nər
18	Treasurer	トリーシュ(ジュ)ラル	ツ <u>レ</u> ジュラル	ツはアクセント?
19	Protector	プロテクトル	プロテ <u>ク</u> トアル	tor トアル
20	Chief examiner	チーフ エキサ (ギザ) ミネル	チーフ エ <u>ギ</u> ゼーミナル	規則どおり ゼーはアクセント?
21	Judge	ジュージ	ジュージ	規則どおり
22	Admiral	アドミラル	アドミラ <u>ラ</u> ル	ad - mi - ral (ラール)
23	Traitor	トレートル	トレ <u>ー</u> トアル	tor トアル
24	Commissioner	コム ミスシヨナル	コム <u>ミ</u> スシヨナル	/com - mis - sion - er/
25	Colonel	コロネル	コ <u>ル</u> 子ル	/kər - nəl/
26	Colonel of a regiment	ラフ エ レジメスト	ラフ エ レジメスト	規則どおり 規則どおり
27	Chancellor of slate	チェヌセルロアル ラフ スレート	チェヌ <u>シ</u> ロアル ラフ スレート	/chan - sə - lər/ 規則どおり
28	Chancellor	(省略)		
29	President	プレジデスト	プレジデスト	規則どおり
30	Prefect	プレフェクト	プ <u>リ</u> フェクト	pre プリ
31	Director	ヂレクトトアル	ヂレクトトアル	規則どおり
32	Major - general	メージョアル ジェネラル	メー <u>ジョ</u> ーアル ジェネラル	/mei - jor/ 規則どおり
33	Officer	オ (フ) フィセル	ラ <u>ッ</u> ヒシアル	of ラッ f ヒ。erアル
34	Civil officer	シヴキル (同上)	シヴキル	規則どおり
35	Military officer	ミリタリ (同上)	<u>メ</u> リタリ	「メ」はアクセント?
36	(1語) Local magistrate	ローカル マジストレート	ロー <u>ケ</u> ル マジストレート	ほぼ規則どおり ほぼ規則どおり
37	Captain	ケプテヌ	<u>カ</u> ピテヌ	ほぼ規則どおり
38	Naval officer	子ーヴァル (省略)	子ー <u>ヴ</u> エル	ほぼ規則どおり
39	Interpreter	イヌテルプレテル	イヌ <u>タ</u> ルブリタル	inter/preter と音節を区別
40	Consul	コンシユル	カ <u>ラ</u> ヌシユル	oun との勘違い?
41	Centurion	セヌチュリオヌ	セヌ <u>チ</u> ューリオヌ	アクセント?
42	Lawyer	ローイエル	ロー <u>イ</u> アル	/loi - ər/

順序	原 語	一 般 則	福 沢	備 考
43	Clerk	クレルク	クラルク	米/klɜ:k/長音は英
44	Great person	(省略) ベルソヌ	パルスヌ	er パル
45	Assistant	ア (エ) スシスタスト	エシスタスト	前にエシステスト
46	Police runner	ポリス ロナナル	ポーリス ロナナル	アクセント誤? 規則どおり
47	Soldier	ソルヂェアル	ソルヂェアル	/sol - jər/
48	General	(省略)		

48 語句中「(ほぼ) 規則どおり」を除いて、多少とも規則から外れるものは33ある。それらは、やや我田引水になることを恐れなければ、正しい発音の表記と関係するようである。上記33の大部分は、(1)正しい音節を暗示するもの、(2)正しい母音とそのアクセントを暗示するもの、(3)福沢の間違い、及び(4)その他、に分類される。以下の発音表記 (/ / 内) はウエブスター式。

1. 正しい音節を示すもの

12. Courtier (コーアルチェアル) : /cour - tier/ [ーアル] で2つの音節の切れ目を示す。
17. Governor (ゴーヴルノアル) : /gə - vər - nər/ [ゴーヴル] で第1、第2音節を示し、[ノアル nər] で第3音節を示す。少なくとも第2と第3の音節の切れ目は示されている。
24. Commissioner (コム ミスシヨナル) : この発音は /kə - mi - shə - nər/。これから判断すると福沢のカタカナ表記は「日本式」となるが、スペル上の音節 (/com - mis - sion - er/) を見れば、「コム・ミス・シヨ・ナル」と音節を区分けした可能性もある。発音とスペルの音節の混合は他人の音節毎の発音を書き取る時に起り得ると思われる。
27. Chancellor (チェヌシロアル) : /chan - sə - lər/ は、「チェヌ・シ・ロアル」となる。第2音節を [セ] ではなくて [シ] としたため、それが弱音節であることを示す。
32. Major (メージュアル) : /mei - jər/。メー・ジョアル [mei] [jər] と2音節に切れる。
36. magistrate (マジストレート) : /ma - jə - strat/ 「マジ」で第1、第2音節を、「ストレート」で第3音節を示す。「ストレート」では第3音節を示せない。
39. Interpreter (イヌタルプリタル) : inter (イヌタル) /preter (プリタル) と、第1、第2音節と第3、第4音節を区別している。
42. lawyer (ローイアル) : /loi - ər/。ローイ /loi/、アル /ər/ と正しい音節の区別を表す。
44. person (パルスヌ) : /pər - sn/。「パル」で第1音節、「ソヌ」で第2音節を示す。

2. 正しい母音及びそのアクセントを暗示するもの

2. Duke (ヂューク) : 長音でアクセントを示す。
3. Marquis (マルクウヰス) : /ma : r - kwəs/ 第2音節の /kwəs/ の <w> が表示されているようである。<w> はスペルに無いことに注意。
6. Baron (バーノル) : /bar - ən/ の第1音節のアクセントの表示。
11. Princess (プリヌシス) 「シ」で第2音節の弱いアクセントを表示。
13. Imperial (イムピーリエル) : 「ピー」は第1アクセントの位置。
guard は発音の仕方によっては、<ゴールド> と聞こえるかもしれない。
14. prime (プライム) : 正しい母音の発音を示す。

16. literati (リテレーチ) : /li-tə-ra-te/. 「レー」で <ra> にある第1アクセントを表示。また、「チ」で第4音節の長音の発音を表示か。
18. Treasurer (ツレジュラル) : 「ツ」は第1アクセントのある音節 /trea/ の強い t 音を表す。
20. Chief examiner (エギゼーミナル) : 「ゼー」は第1アクセントの位置。
22. Admiral (アドミラル) : /ad-mi-ral/. 「ラル」で第2アクセントを表示。
25. Colonel (コル子ル) : /kər-nəl/ であるが、これをコル・ネルと聞くことはあろう。Colo が「コロ」ではないことに注意。「コル」で第1音節を示す。
30. Prefect (プリフェクト) : /pre-fect/ の /pre (i) / は長音で、この音節にアクセントがある。前の President (プレジデスト) は /pres-i-dənt/ で /pres/ にアクセントがあるが、母音は長音ではない。プレとプリ(長音)を区別して、正しい発音を表記しているのか。いずれにしても完全なローマ字読みではないようである。
35. Military (メリタリ) : 「ミ」ではなくて「メ」として、第1アクセントを示す。
41. Centurion (セヌチューリオヌ) : 「チュー」で第1アクセントを示す。こんな珍しい語のアクセントを正しく表示できるとは。
43. Clerk (クラルク) : 米音は /klɜrk/. 福沢の表記は正しい。長音はイギリス流発音。
44. Great person (パルスヌ) : <per> は「ベル」や「ペル」よりも「パル」に近いかもしれない。
3. 福沢の間違い
21. Judge (ジュージ) : ju は「ジュー」との長音ではない。
33. Officer (ヲッヒシャル) : /of-i-sər/. <of (ヲッ) f (ヒ)> とは福沢読みであるが、cer が /cial/ を暗示する「シャル」になっていることは間違いであろう。
40. Consul (カヲヌシュル) : on と oun との違い。
46. Police (ポーリス) : 「ポー」が第1アクセントを示しているとすれば、間違い。
47. Soldier (ソルヂーアル) : /sol-jər/ 「ヂーアル」が第1アクセントを示しているとすれば、間違い。
4. その他
- (A) 語尾 er/or の小文字表記。
- (1) er は子音 + [(ア) ル] と一般化の傾向
soldier (ソルヂーアル) / officer (ーシャル) / interpreter (ータルータル) / lawyer (ーアル) / commissioner (ーナル) / minister (ータル) / runner (ロヌナル)
- (2) 語末の or (tor/nor/lor 等) は子音 + アル と一般化の傾向
protector (ートアル) / traitor (ートアル) / director (ートアル) / governor (ーノアル) / chancellor (ーロアル) / major (ージョアル)
- 例外 emperor (ーラル)、
- (B) 1 単語中に同一の子音が2個現われる場合のカタカナ表記 (例外はある)
- (1) カタカナを重ねる場合は、強音節 + 弱音節。[´] はアクセント記号。
ーアベンディクスAより
villeg (ヴェルレジ) / ví-lij/ ; barren (パルレヌ) / bār-ən/ ; planet (ブラヌ子ト) / plá-nət/
例外 : paddy (ベヂ)
- ーアベンディクスBに追加
commissioner (コムシヨナル) / kə-mí-shə-nər/ ; runner (ロヌナル) / rá-nər/
- (2) カタカナが1個の場合は、弱音節 + 強音節、あるいは1音節の語
ーアベンディクスAより
- (251)

terrestrial (タレストリアル) /tə-res-trē-əl/ /te/は弱音節、/res/は強音節。; hill (ヒル)
-アベンディクスBに追加
chancellor (チェスシロアル) /chan-sə-lər/。/lər/は弱音節であるが、直前の/sə/が極めて弱い
ために、相対的に少し強く発音される。
assistant (エシスタ(テ)スト) /ə-sis-tənt/。/ə/は弱音節。/sis/は強音節。
earl (イーアル) /ɛrl/米語ではrとlの両音が発音される。福沢のカタカナ表記では「ル」1文字。1音節
のためか。

(3) 促音化する。

-アベンディクスA isthmuse (イスマス) /is-məs/
-アベンディクスBに追加
official (オフシール) /officer (ヲフシアル) /tittles (チットルス) —— これはtitlesの誤りであるが、
tittlesを発音すれば、(チットルス)であろう。
commissioner (コムミショナル) も促音化の1例であるとも考えられよう。